

# ロシア・カレリア地方に生きる一女性の人生と呪術 —ナターシャ・クルチーニナの不幸をめぐる民族誌資料—

## Natasha Kruchinina's Trials and Tribulations of Being a Witch —Ethnographical Materials about the Woman Living in Karelia—

藤原 潤子 (Junko FUJIWARA)\*

キーワード：呪術、世界観、ライフヒストリー、ロシア、カレリア

Keywords : magic, witchcraft, outlook on the world, life history, Russia, Karelia

### 1. はじめに

エスニック・ロシア人に関する民族学的研究の中で、民間信仰・呪術に関連する研究には大きな蓄積がある。19世紀から現在に至るまで、数多くの資料が収集され出版されている。従来の研究には、集められた資料を分類し、それを使ってかつて存在したであろう世界観の再構築を目指す方法がよく見られた。しかし、コンテキストから切り離された資料の断片から再構築された世界観は、単一の個人に回収することが不可能な不自然なモザイクとなってしまふ。2002年8月に行ったロシア・カレリア地方での一ヶ月の調査で、筆者はナターシャ・クルチーニナ（仮名）という40代半ばのひとりの女性と出会った。彼女は不幸に満ちた自らの人生を語ってくれた。その不幸は、祖母の代にかけられた呪いに端を発するものであるという。本稿では彼女の語りを提示することになるが、それを通してロシアにおける従来の呪術関係資料のあり方、及び世界観の再構築という方法への批判を行う。従来の世界観の提示の仕方では、世界観というものが共同体全体に静的に存在しているかのような印象を与えていた。しかし、ナターシャの語りからは、内面世界は様々な人との出会いを通して常に生成されていく過程にあることが分かる。誰のものでもない世界観を作り上げるのではなく、実際に生きられたひとりの人間の人生を通して、その世界を見るという方法を提示したい。さらに、彼女の語りから、呪術が単に過去の残存であるだけでなく、現在に生き、時代を語るものでもあることも示されるだろう。とはいえ、本稿は論理的問題や踏み込んだ分析を目的とするものではない。目的はあくまでも、ナターシャの語りを記述資料として提示すること自体にある。

今回の調査は筆者にとって初めてのフィールドワークであった。人類学は経験に等しいと言われるが、初めてのフィールド経験、特にナターシャとの出会いは、研究の方向性を決定的に変えるきっかけとなった。本稿ではナターシャの人生を提示しつつ、フィールドでの筆者自身の変化も記述

---

\* 東北大学東北アジア研究センター

されることになる。筆者はかつて何の疑いも抱かず、従来の研究方法を踏襲しようとしていた。それがフィールドでどのように崩されていったかを記述することによって、従来のロシア民間信仰・呪術の研究方法を批判し、新たな方法を示せるものと考ええる。

2章からは筆者がカレリアへ行くことになった経緯、及びそこでのナターシャや奇妙な共同研究者との出会いが、3章ではナターシャの住む地域についての呪術の文脈が記述され、4章では彼女の語りが提示される。

## 2. ロシア「呪術」研究の傾向と批判

ロシア人研究者で最初に民間信仰・呪術に興味を持ったのは、医師でもあったサハロフである。彼は1836年に『ロシア民衆の言い伝え』第1部を出版した[Сахаров 1836]。その後、テレシエンコの『ロシア民衆の風俗』[Терещенко 1848]、マイコフの「大ロシアのまじない」[Майков 1869]、エフィメンコの「アルハンゲリスク県のロシア人に関する民俗資料」[Ефименко 1877-1878]、ダーリの『ロシアの民間信仰、迷信』[Даль 1880]、ザブイリンの『ロシアの民衆、その習俗、儀礼、伝説、迷信、詩』[Забылин 1880]、シェインの『北西ロシア地域のロシア人習俗と言語研究のための資料』[Шейн 1893]、ポポフの『ロシアの民間療法』[Попов 1903]、マクシーモフの『魔物・目に見えぬ力・聖なる力』[Максимов 1903]、ヴィノグラードフの『呪文、魔除け、救いの祈祷他』[Виноградов 1907-1909]、リュブニコフの『歌』[Рыбников 1910]など、ここにすべてを挙げることはできないが多数出版されている。最も初期の資料は「蒙昧な民衆」を啓蒙するのを目的として収集された。ソ連時代に入って呪術関係の出版はしばらく途絶えたが、近年また盛んに出されるようになっていく。トーレンの『19-20世紀初めのロシアの民間療法』[Торэн 1996]、アニーキンの『ロシアの呪文とまじない』[Аникин 1998]、クレツの『カレリア地方のロシアの呪文』[Курец 2000]、ヴラーソヴァとジェクリナの『ノヴゴロド州のフォークロア』[Власова, Жекулина 2001]などである。また、上記の革命前の資料も数多く再版されている。

ロシアの呪術・民間信仰研究のひとつの大きな柱となっているのが分類である。上記に挙げたものは、ヴィノグラードフを除いてすべて何らかの分類が施されている。呪文、儀礼、世間話などのジャンルに分けられ、例えば呪文なら愛の呪文、病気の呪文など目的別に、さらに病気の呪文なら病気の種類ごとに、また世間話なら、呪術師の話、森の<sup>ぬし</sup>主の話、水の<sup>ぬし</sup>主の話のように下位分類され、列挙、記述される。クリャウスの『東・南スラヴの呪文テキストのモチーフ及びモチーフ展開索引』[Кляус 1997]のように、資料提示でなく分類自体を目的とした著作もある。この本では、呪文のモチーフが約1000種類に分類されている。上記のような研究を集成・分類したものとしては、ヴラーソヴァの『ロシアの迷信』[Власова 1998]、トルストイ他編著『スラヴの昔』[СД 1995・刊行中]などの事典が挙げられる。この『スラヴの昔』(5巻本)は神話的形象だけでなく、たとえば風呂、白樺、針、門などの身のまわりの物や、春、風などの現象その他が民間信仰の文脈で多くの事例と共に記述されている点において、現在ロシアの民俗を研究する者にとって最良の事典と言えるだろう。

う。

『スラヴの昔』の前書きには次のように記されている。「この事典の目的は、単に過去の残存をひとつに集めて解釈するだけではなく、可能な限りそれらを基に完全な伝統的《世界像》、古代スラヴ人の世界観、コスモロジー、神話的世界、自然観や信仰を再構築し、精神的、道徳的、社会的なステレオタイプや価値観、文化の象徴システムを映し出す、中世スラヴの民衆文化の豊かな概念世界を明らかにすることにある」[CD 1995: I-5]。収集・分類された資料を使つてのこのような世界観の再構築は、ロシアの民間信仰・呪術研究において非常によく見られる方法である。『人体：ロシア人の伝統的身体観に見る人間』を著したマザーロヴァは、現代の社会科学の流れに於いて最も重要な課題のひとつは、多様な人間の社会に存在する世界像の再構築であるとする中世史家のグレーヴィチの言葉[Гуревич 1989]を序文に引用し、それに貢献するものとして、ロシア人の身体観再構築という自らの試みを位置付けている[Мазалова 2001: 5]。その他、アフアナシエフは自然観を[Афанасьев 1865-1869]、バイブリンは家にまつわる世界観を[Байбурин 1983]、デニーソヴァは世界樹にまつわる観念を[Денисова 1995]、トルスターヤは魂に関する観念を[Толстая 2000]、という具合に再構築が試みられている。これらの著作はスラヴの、またはロシアの、または何々地方の世界観という具合に、一般化して記述されている。

ここに一定の研究の流れを見て取ることができる。文化保存のための資料収集→資料の分類・列挙→分類された資料及び古い記述史料などを使つての世界観再構築、という流れである。しかし、整然と分類された資料として出版する際に、資料はコンテクストからバラバラに切り離されてしまう。語りの中で前後のつながりから見て取れる一見些細な、しかし実は重要かもしれない情報は捨てられる。そしておそらく、語り手が表現していた感情も切り捨てられる（いや、もしかして最初から調査者はそんなことには興味を持っておらず、記録されていないのかもしれないが）。そして資料は無味乾燥な情報の断片と化す。本稿で提示するナターシャの語りには頭痛についての話が含まれているが、それとの比較のために、最近出版された資料集の記述を一例として挙げてみよう。「治療の呪文」の章の「頭痛の呪文」の項に分類されているもので、1991年キーロフ州採集である。「№1371 日の出時におもてに出て、太陽を見ながら薬指で頭の周りに円を描き、頭痛が治るように唱える。『洗足木曜日<sup>1</sup>に太陽が昇り、喜びがあふれ、花が咲き乱れるように、私の頭も痛まず、ふらふらせず、喜びに満ちますように』」[Аникин 1998: №1371]。この資料から、呪術に訴えざるを得ない切迫感、苦しみは感じ取ることにはできない。単に頭痛を取るための「技術」としてのみ提示されており、このような断片から世界観が再構成されていく。断片を張り合わせたモザイクであれ、何らかの「世界」は作り上げられるとしよう。しかしその「世界」で実際に一個人が何を感じ、どう行動し、どう生きうるのかは全く見えてこないのである。例えて言えば、立派な舞台は出来たが役者がいないと言ったところだろうか。

従来の世界観、コスモロジー、文化の研究方法に対して、アフリカのドゥルマをフィールドとして研究している浜本満が適切な批判をしている。彼によると、これまでの世界観研究、つまり出所

の異なる複数の人びとの語りや別々の機会に観察された諸実践の資料を、その中に見て取られたパターンにそって整理し、諸断片を関連付け、ある体系性を持ったより大きな全体の一部になるように組み立てる、という方法で取り出した知識体系は、原理的に特定の単一の個人に回収することが不可能なものになる。それをそっくり抱え込んでいるような個人はひとりも存在しないし、ましてやそれがすべての人々に共有されている可能性など皆無である。よってその体系は、集合体である何々人の記述としての資格を持たない。そして浜本は、ではそれはいったい《誰の》知識なのだろうかと問うている[浜本 2001: 39-42]。ロシアの呪術及び民間信仰研究において、このような方法でいびつな世界を再構築するのはもうやめるべきではないだろうか。『スラヴの昔』の序文にあるような「完全な伝統的《世界像》」は幻想にすぎない。それよりも、もっとインフォーマント一人ひとりの語りに耳を傾けるべきではないだろうか。

ナターシャは私たちの求めに応じて、自らの不幸な人生について語ってくれた。彼女の人生に起こった「客観的」事実を挙げてみよう。兄弟のように育った叔父のうちひとりとは溺死、もうひとりとは殺害されている。ナターシャ自身は 13 年間にも及ぶひどい頭痛、胸のフルンケル（化膿菌による皮下組織の急性炎症）を患った。彼女の祖母は盲目になり、3 人の子どもは腐敗症などで数度死にかけ、また目や耳も患った。姑とうまくいかず、夫とは離婚。さらに、ナターシャの妹の夫がその兄弟と共に溺死している。彼女はこれらはすべて呪いのせいだと考えている。呪術的世界を現実として生きている彼女は、感情をほとばしらせ、涙ながらに語った。こういう語りに対する着目と分析こそが、ロシアの呪術研究に欠けていたものではないだろうか。呪術を「技術」や「知識」の断片としてのみ扱うのではなく、生きられた体験であることを感じるところから始めるべきではないだろうか。そのために本稿では彼女のライフヒストリーを提示したいと考えている。

ナターシャは不幸の原因を知りたいと考え、不幸から逃れるために、噂を聞きつけては近郊に住む呪術を知る人、超能力者たちの元を訪ねている。彼女の人生を通した語りからは、周囲の人間によって原因が特定され、その時点から遡って人生の物語が書き換えられ、体験しなおされる、そういうプロセスが浮かびあがってくる。日本で医療人類学を切り開いてきた波平恵美子は、文化が異なると個人にとって困難や苦悩の体験の内容も異なると述べているが[波平 1994: 146]、ナターシャの不幸はまさに彼女の生きる言説空間独自の方法で体験化されていた。今回は詳しい分析は行わないが、今後彼女の体験を丹念に見ていくことで、モザイクでない現実として生きられた世界が生々しく姿を現すだろう。アメリカの医療人類学者バイロン・グッドは病いを経験の症候群としてとらえ、そこには当該文化の人々が共通して経験する独自の意味が集約されているとしている[グッド 2001: 301-302]。病い、不幸、死、浮気などの出来事が網の目のように互いに結び合わされているナターシャの語りは、彼女の住む世界独自の意味を明らかにするための絶好の資料である。また、長島信弘が言うところの「災因論」の視点[長島 1983: 597]からの研究も可能であろう。

ロシアの呪術・民間信仰研究でもう一つ批判されるべき点は、資料を過去の残存としてのみ扱う傾向である。もちろん過去の残存であることは間違いではないが、同時にそれは今現在生きている

ものでもある。今回の調査でナターシャの語りを含め、呪術は時に社会主義時代と対比的に語られることに気づいた。ソ連が崩壊して 10 年経った今、そのような語りはどういう意味を持つのだろうか。人生を通した語りから、彼女が生き、そして現在につながっている時代も見えてくるかもしれない。

### 3. 「呪術師」研究者との出会い——現地調査の背景

2002 年 8 月、ロシア人の呪術信仰に関する資料を求めてロシア・カレリア地方に向かった。ロシア語学科出身の私は、ロシアの口承文芸や習俗について調べるうちに、その世界観に興味を持つようになっていた。同じ現象を見ても生まれ育った文化が違くと全く違う風に見える、そのこと自体がおもしろかった。民俗資料で今まで自分が考えもしなかったような見方に出会うたびに、新たな世界を獲得したような気分であれしかった。中でも特に不思議で興味をそそられたのが呪術の世界である。世界観の再構築を試みる文献を読んで、私も今まで誰も見出せなかった、失われた世界を再構築したいと思っていた。

私は長い間フィールドワークに出なかった。なぜなら資料は山ほど出版されていたからだ。失われた古い世界観の再構築のためには古い資料ほど価値が高い。今行ったところで、私の手元にある 19 世紀から 20 世紀初頭の資料より面白いものはあるまい。アフリカかどこかの伝統的社会なら呪術は生きているだろうが、70 年以上も社会主義体制が続いた国に見るべきものが残っているとは思えなかった。1998 年に出版された『ロシアの呪文とまじない』[Аникин 1998]には、驚くべきことに 1953 年から 1993 年の間に採集された 2464 編もの呪文・まじないが掲載されていた。その中にはつい最近、90 年代に採集されたものも多い。しかしそれでも私には行く意味があるとは思えなかった。その本には、採集年、語り手の生年、居住地以外、採集時の状況は一切書かれていなかった。おそらく、何十年も前に見聞きしたことを思い出してもらったのだろう、そう私は解釈していた。

私のテーマは、10 世紀末にキリスト教を受容する以前から続くロシア異教文化の死生観の再構築だった。公刊された資料を使って私は世界観の再構築を試みた。しかし一晩経って書いたものを見るといつも、分類されている資料を並べ替えたにすぎない、並べ替えて共通点を指摘しただけだと気づくのだった。そんなことは資料さえ読めば、私が書くまでもなく誰にでもわかる。世界観の再構築という作業の意味がだんだんわからなくなってきた。そんな中でフィールドに出かけることを決心したのである。すでにある資料集より良い資料を見つける自信はなかったし、資料集に整然と分類されている資料以上の資料は想像できなかった。私の使っている資料に欠点がある、もっとごちゃごちゃした資料を使わないと駄目だと誰かに指摘されたこともあった。しかし、ジャンル別、テーマ別に分けられて実に検索しやすいこれらの資料が、なぜごちゃごちゃした資料に劣るのか、私にはどうしても理解できなかった。ただ、資料がどういう風に集められているのか、村では人々はどのような風に生活しているのか、呪文を唱える時の声色、それに伴う動作、それが行われる場所、誰が唱えるのか、呪術師や物知り（呪術で治療などを行う人。後述）はどんな姿をしているのか……

少なくともそのあたりは見ておく価値はあるかもしれない。そんなことはほとんど書かれていなかった。書かれてあったとしても、リアルに想像できるところまでは程遠かった。こうしてやっと、重い腰を上げて出かけることに決めたのである。

今回の1ヶ月の調査は予備調査的な意味合いを持っており、単独ではなく現地の研究者との共同調査として行った。ペテルブルグの人類学民族学博物館（クンストカメラ）を通して紹介されたナウモフ氏（仮名）はカレリア学術センター言語文学歴史研究所に勤める民族学者で、専門はカレリアの物質文化である。私の希望を伝えると、「最強の呪術使いに会わせてあげよう」とメールで返事をくれた。しかしその返事も、私は半分冗談のように受け取っていた。

2002年8月初め、彼はカレリア共和国の首都ペトロザヴォーツクで私を迎えてくれた。父称<sup>2</sup>でイリイチと呼んでくれと言うので本稿でもそう呼ぶことにする。調査は初めてだという私に、彼はまず呪術を調査するにあたっての注意点を述べた。「呪術調査というのはモラルが大切だ。集めた資料をどう扱うか、これは良く考えないといけない問題だ」「どういうことですか?」「たとえば悪い目的に使う呪術をフィールドで採集したとする。夫婦を別れさせる呪術とか。それを活字にしたらどうなると思う? 必ず悪用する人が出てくる。村中離婚になったりしたら大変だ。だから私は引用する時には、『どこどこには夫婦を別れさせる呪術がある』とだけ書いて、詳細は書かない。もし呪文を載せるとしても一部変えて載せる。そしたら力は失われるから心配ない。お前は日本語で書くんだろけど、どうするかよく考えることだ」「はあ…。そして、犬の毛と猫の毛を持って夫婦の間を通り、犬と猫のように仲を悪くさせる呪術は、日本でも間違いなく効くと語った。さらに彼は言った。「呪術調査は実に危険な仕事だ」「どうしてですか?」「強い呪術師に呪術をかけられることがあるからだ。7-8年前に、アメリカ人の女性研究者が調査に来たことがある。彼女は呪術師のところでノートをもらった。それでその後どうなったと思う? 博士論文は書けなかったし、夫は殺されたし、ふたり目の夫はアル中になってしまった。人生めちゃくちゃだ」「そのノートのせいなんですか?」「そうだ、だからノートをあげようと言われても注意しないといけない。私は怖くて断ったこともある」「…。呪術師のノートには呪文が書き付けられている。そんな最高の資料を受け取らないなんて、私には考えられない。こうして大きなカルチャーショックを感じつつ、彼との共同調査が始まった。

私たちはまず、ペトロザヴォーツク周辺からまわることにした。だいたい車で1-2時間以内の集落である。彼が事前収集していた情報はいつもあいまいだった。あの村にはすごいばあさんがいるという噂だけで、全く名前もわからずに出かけることも多かった。しかし村に着いて「治療するばあさん知りませんか?」と聞くと、誰でも知っていた。ノーヴィエ・ペスキーに住む物知りのゾーヤ・ゲオルギエヴナのところに行った時のことである。車で着いた時、彼女は窓辺で手を振った。私たちは呼ばれたのだと思って家に入った。彼女は水で占う。柄杓に汲んだ水を見ると、体のどこが悪いか、呪いがあるかなど、すべてがわかるらしい。後で聞くと、彼女は私たちに手を振ったのではなかった。彼女の唱える呪文によって窓辺に現われた水の主（водяной）<sup>ぬし</sup>に手を振ってい

たのだ。ロシアの呪文は森の主や水の主、風の主や朝焼けの乙女など、自然を司る者に対する呼びかけの形で唱えられることが多い。穏やかに微笑んで水の主に手を振る彼女の姿はとても美しかった。

調査を始めてしばらくしてわかったのは、共同研究者のイリイチがカレリアで最も有名な「呪術師」のひとりだということだった。カッコ付きなのは、呪術は信じるが自分は研究者であり呪術師ではないと本人が主張しているからである。ある呪術師に呪術を継承して欲しいと言われたこともあるが、自分には魔物を制御する力はないだろうし、恐ろしいから断ったという。ではなぜイリイチは「呪術師」と呼ばれるようになったのだろうか？ カレリアでは「あの人は知ってるよ Он (она) знает.」というフレーズをよく聞く。補語なしで、時に「知ってる」の部分に独特のアクセントを置いて、またはちょっとニヤリとしてこのように言う場合、呪術を知っていることを意味する<sup>3</sup>。良い目的のための呪術を知っているという意味であることも、悪い呪術であることも、またその両方の場合もある。民族学者として様々なインフォーマントに話を聞いているイリイチは、実際どんな呪術師よりもよく知っていた。だから困っている人がいれば、どんな呪文を唱えれば良いか、どんな儀礼をすれば良いか教えていた。しかも時々ローカルテレビやラジオに出演して呪文や新年の占いについて話している。そういうわけで彼は地元で一番有名な「呪術師」だった。

イリイチの調査は全く奇妙だった。聞き取り調査中、私はまるで魔法使いの会合にでも同席しているような感覚におそわれることがあった。インタビューの場は調査者対インフォーマントというより、しばしば呪術的知識交換の場になった。イリイチがインフォーマントの治療をすることもあった。彼はよく知っている者として相手の尊敬を得て巧みに話を引き出した。最初は知らないと言っていたインフォーマントでも、彼が知っていることを少し話すと、それにつられて自分が知っていることを話し出す。私たちはたいていリングやチョコレートなどちょっとした手土産を持って行ったが、最も喜ばれるお礼は呪文だった。彼は話の中から相手が何に困っているかを察し、それに効く呪文をお礼に教えた。隣人の嫉妬のせいで悪いことばかり起こると語る人には守りの呪文を、お腹が痛む人にはそのための呪文をという具合に。

彼はインフォーマントが呪術儀礼に与える解釈を訂正し、「正しい」解釈を教えることさえあった。しかし、出発前に読んだ『フィールドワークの技法と実際』には、スプラドレー[Spradley 1979: 79-81]を引用しつつ、次のように書かれていたではないか。つまり、インタビューをする時は、相手の言うことを価値判断抜きに聞いて繰り返し、インフォーマントの話が面接者にとって価値があることを伝えるのが良い。面接者が解釈を加えた途端、相手は地の言葉で話すことを止めがちである[箕浦 1999: 47]。私は彼があまりにも呪術を信じすぎている、研究者ならもっと客観的であるべきではないかと批判してみたりもした。しかし返ってきたのは、「なぜお前が呪術を信じないのか、全く理解できない」という言葉だった。そして、自分がかつては熱心な共産党員だったこと、しかし間違いに気づき離党したこと、呪術など信じていなかったが、ある時試したら効いたことなどを話し始めた。呪術が効くという「証拠」は山ほどあった。自分の考えた呪術でとても意地の悪い女

性を劇的に変えて良い人にしたこと、友人の結婚式で自分が呪術で新郎新婦を守ったこと、自分が採集した呪術を人に話したところ、その人が試しに使って大変なことになったこと……。私は次第に、カレリア一有名な「呪術師」を観察するのも悪くないかもしれないと考えはじめた。「呪術師」が元共産党員なら、なおさらおもしろいではないか。こうしてイリイチは私にとってフィールドワークの師であり、共同研究者であると同時に観察の対象ともなった。

私たちは1週間程度ペトロザヴォーツク周辺の物知り、超能力者を訪ね歩いた。イリイチは呪いを解くためにこれらすべての人のところに通ったという女性も見つけてくれていた。それがナターシャだった。ナターシャの故郷を現在のフィールドとしているイリイチは、ナターシャの祖母（故人）や母親にはすでに会っていた。イリイチとナターシャが知り合ったのは、ナターシャの母親を通してである。イリイチが呪術を知っており、また物知りの知り合いも多いので、彼に相談するよう母親がナターシャに言ったのだ。イリイチが不幸なナターシャを助けてくれるかもしれないと思って。イリイチは電話で数回ナターシャと話したことはあったが、会うのは今回が初めてだった。私たちが彼女の家を訪ねたのは夜9時半頃だった。彼女は仕事から帰ったばかりだったが快く出迎え、まず大切にしているアイコン（聖像画）を見せてくれた。聖母が幼いキリストを抱いているアイコンで、祖母がシベリアから持ち帰ったものだという。手早く夕食を済ませ、お茶を飲んだ後、彼女は語り始めた。3時間休むことなく、ものすごい勢いで語り続けた。それは祖母の代からはじまり、ナターシャの子孫にまで伝わって行こうとする呪いの話だった。

彼女の語りは、今まで私がロシアの呪術に関して読んできたどんな資料にも似ていなかった。彼女は呪術的な治療法にも、悪い呪術のかけ方にもあまり興味を持っていなかった。ただただ、自分がどんな状態だったか、いかに苦しかったかを語り続けた。呪術の具体的な方法は、それがことの不気味さを補強するのに役立つ場合のみ語ってくれたと言って良いだろう。彼女の話はあまりにもおどろおどろしく、死臭さえ漂ってくるような気がした。彼女は生きるのに必死だった。病院で医者にかかるのも、物知りや超能力者のところへ通うのも、とにかく呪いから身を守り生きるためだった。伝統的な手段か現代的な手段か、科学的かそうでないかは全く問題ではなかった。彼女の語りを聞いて初めて、私は今まで読んでいた資料が切り刻まれ、断片化したものだということに気づいた。そういう資料には手段、方法は書かれていたが、それを行う人間は見えなかった。このナターシャの語りも従来の資料採集者の手にかかると、呪いのかけ方、民間療法、呪文、世間話といったジャンルに切り刻まれるのだと気づいた時、私は驚いた。しかしジャンルが一体何だというのだろうか。切り刻まれればこの語りの持つ価値が失われるのは明らかである。彼女の話の中ではすべてが絡み合っていた。ひとつの出来事は他の出来事の原因でもあり、証明でもあった。切り取ってしまえば何の意味も持たないように見える言葉が、全体の中では重要な役割を果たしていた。語り手の内部でこのようにつながり、ひとつの内的世界を作り上げているものを切り離すことなどできない。私は、多数の人から聞いた語りの断片をつなぎ合わせるのではなく、ひとりの人間の目を通して世界を見る、そういう方法もあるのではないかと考え始めた。

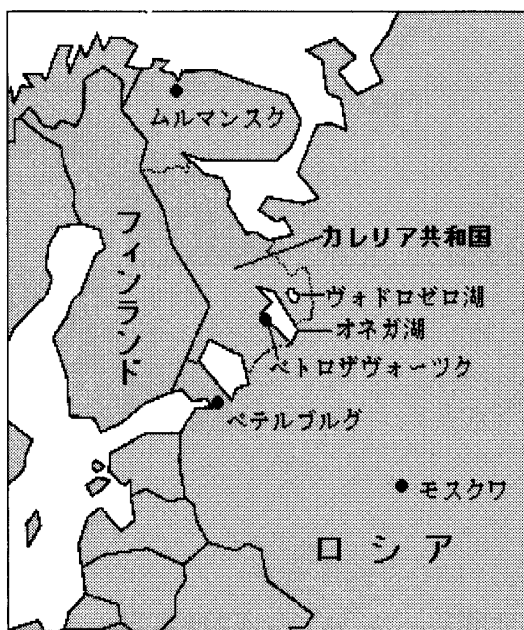


### 3. カレリア地方ヴォドロゼロ地域における「呪術」の文脈

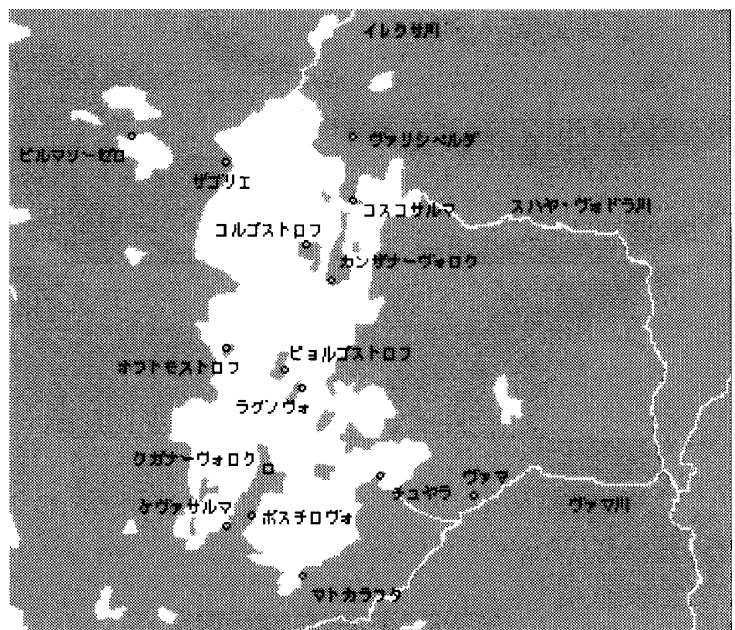
ナターシャの住むカレリア共和国はロシアの北西端に位置し、西はフィンランドと接している。人口は76万人(2001年)、人口構成は、ロシア人73.6%、カレリア人10.0%、ベラルーシ人7.0%、その他が9.4%となっている(1989年)。オネガ湖西岸に位置する首都ペトロザヴォーツクから現在ナターシャの住んでいるプチツェファールブリカまでは車で数十分である。カレリア共和国は全土の62パーセントが針葉樹林に覆われ、6万の湖が散在している。主な産業は木材工業。カレリア人はフィンランド人と人種も言語も同類だが、スウェーデン、ロシアの対立で、フィンランドがスウェーデンに支配されたのに対し、カレリアはロシアに支配された。度重なる戦争で、国境は何度も引きなおされている。

ナターシャの故郷と祖母の村はカレリアにある6万の湖のひとつ、ヴォドロゼロ湖に面している。土地はやせており、人口を養えるほどの作物はとれない。主要な産業は漁業である。牛を大切に飼っている家が多い。村と湖の周りは深い針葉樹林に覆われている。ヴォドロゼロ沿岸に人が住み始めたのは約8-9千年前のことである。9世紀にサアム人とフィン人に代わってロシア人がヴォドロゼロにやって来たが、それ以降、この地方は大ノヴゴロドの沿オネガ行政区に入った。ロシア人のカレリアへの進出は、大ノヴゴロドから白海への商業ルートの開設と関係している。ノヴゴロド人はこの地方に自らの文化をたずさえてきた。僻地であるヴォドロゼロの地は17世紀から18世紀には、正教会に破門されて国家権力に迫害された分離派<sup>4</sup>の住む場所ともなった。ヴォドロゼロはまた英雄叙事詩(былина)の宝庫としても知られる。ギルフェルジンはこの地で多くの英雄叙事詩を採集し、世に知らしめた[Гильфердинг 1871]。

ヴォドロゼロ地域には20世紀初頭には40の村が存在し、総人口は2600人以上にのぼったが、1960年代に始まった「将来性なき村の合併政策」により政府から移住が命じられたせいで、20世



カレリア周辺



ヴォドロゼロ湖周辺拡大図

紀末までに人口は 550 人程度にまで減少した。多くの村が廃村となったが（現在残っている村は、ヴァリシペルダ、コスコサルマ、カンザナーヴォロク、クガナーヴォロク、ボスチロヴォ、ケヴァサルマの 6 つ）、ナターシャの故郷でありこの地域の中心地でもあるクガナーヴォロク村の人口は、逆に他村からの流入により 19 世紀末の 192 人から 2.5 倍以上に増えた。人口の増加は村に大きな打撃を与えた。集中的に漁業、農業が行われた結果、自然資源が枯渇し、ますます多くの食糧を外から入れなければならなくなった。1991 年以降、この地域はヴォドロゼロ湖とそこに注ぐイレクサ川保護の目的で作られたヴォドロゼロ国立公園の一部になっている。現在クガナーヴォロクの人口は 560 人程度である<sup>5</sup>。

ヴォドロゼロ地域の村人たちは、周囲のあらゆる空間に超自然的存在「主<sup>ぬし</sup>хозяин」が住んでいると考えている。家には家の主<sup>ぬし</sup>、風呂小屋には風呂小屋の主<sup>ぬし</sup>、森には森の主<sup>ぬし</sup>、湖には水の主<sup>ぬし</sup>がいる。何も知らないという人でも、家や風呂に入る時に主<sup>ぬし</sup>に言うべき言葉のひとつぐらいはたいてい知っている。少々知っている人は、子どもが夜泣きして困る時にどうするかというような子ども関係の呪術や、生まれたばかりの牛や買ってきた牛を家に「据える」というような牛関係の呪術を知っている。よく知っている人は、森の主<sup>ぬし</sup>や水の主<sup>ぬし</sup>と付き合いがあると言われる。彼らは主<sup>ぬし</sup>たちの助けで、森から帰ってこない牛を見つけたり、溺死者の遺体を取り戻したりする方法を知っている。誰を治療するかは人によって違う。家族の治療のみで隣人さえその人が知っているとは知らない場合もある。かなり有名で他の村からも病人がやって来る場合もある。呪術を知っている人は、「ズナハリ знахарь (男) / ズナハルカ знахарка (女)」「コルドゥン колдун (男) / コルドゥーニヤ колдунья (女)」などと呼ばれることがある。ズナハリを直訳すると「(物事をよく) 知っている人」である。この言葉は普通良い目的で呪術を使う人について言う。病気治療や迷子の牛探しなど、様々なことを行う。本稿では物知り<sup>ぬし</sup>と訳すことにする。今回訪ねた物知りの家にはどこでもイコン（聖像画）があった。治療その他はキリストや聖人の力、自然の主<sup>ぬし</sup>たちの力を借りて行う。彼らの唱える呪文には、しばしばキリスト教の祈祷の文句が混在している。

一方コルドゥンは直訳すると「呪術を行う人」の意味である。本稿では呪術師と訳している。呪術師には良い呪術師も悪い呪術師も、またその両方行う者もいる。良い呪術師の役割は物知り<sup>ぬし</sup>と重なる。悪い呪術師はしばしば反キリスト者として語られる。結婚式は人生で最も呪いを受けやすい時と考えられているが、招待されずに気分を害した呪術師によって呪術をかけられることが特に恐れられた。ヴォドロゼロでは、結婚式に呪いをかけられて花嫁が病気になって死んだ、新郎新婦が鶏のような声で突然鳴き出した、初夜がうまくいかなかったなどの話が採集されている [Кузнецова 1997]。だから結婚式では呪術師は丁重にもてなされ、招待された呪術師は他の呪術師から新郎新婦を守る役割を果たした。イリイチが新郎新婦を守ったと上述したが、彼も「呪術師」としてそれを行ったのである。呪術を悪い目的に使った者は死に際に苦しみ、なかなか死ぬことができないと言われる。結婚式での悪さと死に際の苦しみが、呪術師をめぐる世間話の主要なモチーフである。呪術師と言われるのは男性の方が多いが、物知りは女性が多い。

しかし実際には、物知りと呪術師は明確に分けられてはいない。さらに、知っている人について実際に語られる時、物知りや呪術師などという言葉よりも、ただ「ばあさん *бабка; бабушка*」と呼ばれることの方がはるかに多い。これは、物知りも呪術師も職業的なものではなく、誰かに頼まれた際に好意で自分の持つ知識で手助けする、というような性格を持っているからだろう。病気や何か困ったことについて話している時、「ばあさん」と言えば呪術を多少なりとも知っているばあさんを意味することは、ここに住む者ならわかる。ばあさんについての語られ方は例えば次のようなものである。「子どもが泣いてばかりいるので、ばあさんを探しました。〇〇ばあさんは良く知っていて、呪文をかけた水で治してくれました」。ひとりの人が語り手によっては、ばあさんと呼ばれることも、物知り、呪術師と呼ばれることもありうる。

ある意味で、呪術師や自然の主<sup>ぬし</sup>にまつわる民間信仰はロシアのどこにでもあると言える。しかし地域によって性格は微妙に異なる。例えばヴォドロゼロ地域で語られる森の主<sup>ぬし</sup>の話には、次のような筋がよく見られる。牛を森に放牧に出したが、何日たっても戻って来ない。飼い主はあちこち探しまわるとどうしても見つからない。飼い主は森の主<sup>ぬし</sup>と付き合いのある呪術師に頼みに行く。呪術師は森へ行き、森の主<sup>ぬし</sup>に道を「開いて」くれるよう頼む。すると、飼い主はすでに何度も探した場所で牛を見つける。以前探した時に見つからなかったのは、「閉じられていた」からである。地域別の比較研究はしていないので断言できないが、上記のようなモチーフはこのあたりの語りに多いように思われる。

さて、ナターシャの語りを録音した後、私たちは彼女の生まれたヴォドロゼロのクガナーヴォロク村に向かった。ペトロザヴォーツクから1時間半船に乗ってオネガ湖の対岸に渡り、そこから車で走る。道路はもちろん舗装されていない。森の中を2時間弱走ると、ヴォドロゼロ湖のほとりに出た。クガナーヴォロク村は、この湖に突き出た岬の突端にある。クガナーヴォロクとはフィン語系のヴェプス語で「スズキの岬」、そこから約4キロ離れたナターシャの祖母の生地ケヴァサルマ村は「春の海峡」の意である。なぜ春の海峡かというと、やはり湖に突き出たこの村は春、大陸との細い接続部が水に沈んで海峡になり、一時的に岬ではなく島になってしまうからである。

夜、村に到着した私たちは、翌朝バケツをもって湖にでかけた。ここには日本のような水道はなく、給水車が巡回している。しかしそれだけでは生活用水は賄えないので、湖に水汲みに行くのだ。湖に向かう森の小道を朝食代わりにブルーベリーを口に入れながら歩いていく。時々、昔話で魔法使いのおばあさんが使うキノコにも出会う。鮮やかなオレンジ色に水玉模様の入った美しい毒キノコだ。湖の水で顔を洗い、水辺の石に腰掛けて景色を眺める。湖に浮かぶ島の数「1年の日の数ともうひとつ」と言われているが、正確な数は誰にもわからない。ロシアの呪文はしばしば次のように始まる。湖に島があり、島には一本の樹があり…そして樹の傍らには神話的な存在がいる。それは朝焼けの乙女のことあれば、聖母マリアのこともある。呪文では彼らに呼びかけ、願いを叶えてもらう。湖に浮かぶ 20 歩で一周できそうな小さな島に一本の白樺が立っている、そんな風景は天上の楽園を思わせた。

ナターシャの故郷の村には、今も彼女の両親と弟が住んでいる。ナターシャの母親はしきりに隣人の嫉妬のせいで生活が悪いことを私たちに訴えた。妬ましいという気持ち、妬ましいと思って見る視線が無意識に相手に悪い影響を及ぼすと信じられ、誰でも潜在的にこの力を持っているとされる。彼女によると、村中悪い人ばかりらしい。ナターシャの弟は数年前に仕事を首になり、現在も無職だ。首になった理由は、働き者で酒も飲まないから。彼がいると他の者の怠けぶりが目立つというので追い出されたのである。ナターシャの母は何度も何度も、自分がいかにムラシヨフを氣遣っているかを語り、彼が自分の所に寄るのを心待ちにしていた。この村は 1991 年からヴォドロゼロ国立公園の一部となっているのだが、ムラシヨフは公園の敏腕所長として村に入ってきた人物である。年はまだ 30 代半ばといったところだろうか。公園創設の際に果した功績が認められ、若くしてこの地位についた。これが理由なのか、それとも村の男たちとは全く似ていないからなのか、彼は村人に嫌われていた。村人の家に火をつけたという根も葉もない噂まで飛んでいた。新参者で嫌われ者で、かつこの地域一番の権力者ムラシヨフをしきりに慕うナターシャの母の姿から、またよそ者である私たちに自分の窮状を訴える様子から、この家族が村人とあまりうまくいっていないことが伺われた。

ナターシャの母親にもゆっくりインタビューしたかったが、彼女は忙しそうだった。牛がしきりに庭で呼んでいるので、私たちは 2 日後に話を聞きに行く約束をして引き上げた。ところが 2 日後に行くと、彼女はすっかり取り乱していた。ナターシャから電話があり、5 歳になるナターシャの孫が原因不明の急病で危篤だというのだ。この子の無事を祈りつつ、母親の家を後にした。私は新たな呪いの物語が始まったことを感じていた

#### 4. 自らの人生についてのナターシャの語り——資料

##### 4-1 ナターシャの略歴

ナターシャは 1956 年にヴォドロゼロのクガナーヴォロク村に生まれた。8 年生の時に、あることがきっかけとなって、のちに夫となる隣村の若者と親しくなる。15 歳で専門学校入学のためにカレリアの首都ペトロザヴォーツクに移り、18 歳で長男を妊娠して結婚する。25 歳の時にペトロザヴォーツク近郊のニュータウン、プチツェファールブリカに引っ越す。娘とふたり目の息子にも恵まれる。しかし、夫に愛人ができたことにより、7 年前に離婚。2002 年現在 40 代半ばで、3 人の子ども、ひとりの孫と住んでいる。孫は離婚した息子の子である。娘も離婚している。下の息子は 15 歳。ナターシャがこれまで経験した職業は、保母と車掌。現在は工場で働いている。彼女は明るくおしゃべりで善意にあふれる美しい女性だった。今回資料として提示するのは、2002 年 8 月現在のナターシャから見た自らの人生についての語りである。社会主義政権下に生まれ、呪術など信じていなかったと言う彼女の人生を舞台に、多数の人間によって作り上げられた物語である。共同調査者イリイチの発言が入っているが、彼も他の物知りや超能力者同様、ナターシャに解釈を与える者となっている。

呪いというテーマの性格上、本稿の名前はすべて仮名である。文中では便宜的に、話者と親戚関係にある者の親族名称には「爺さん、婆さん、叔父、叔母」のように漢字で、親戚関係にない者は「ばあさん」などのようにひらがなで表記した。限られた紙面の都合上、かなり省略しなければならなかった。また理解しやすくするために、出来る限り彼女の語り口を残しつつ、語りの順序の入れ替えなどの点で手を加えてある。2字下げの小さな字は筆者の解説、丸括弧は補足、【I：】はイリイチの発言、【F：】は筆者の発言である。便宜的に話題を区切り、番号をつけた。

#### 4-2 祖母の人生——呪いの始まり

ナターシャの語りは祖母の話から始まった。ナターシャは現在に至るすべての不幸の根源、呪いの根源は、祖母の代にあると考えている。祖母は帝政ロシア末期の1912年にヴォドロゼロ地域のケヴァサルマ村で生まれた。気の強い、しっかりした人だったらしい。ナターシャは全く語らなかったが、共同調査者のイリイチによると、祖母も少々知っていた。祖母は軍人と結婚するが、戦争で寡婦となり、村で再婚する。ナターシャの義祖父となったヴァーシャ爺さんは非常にやさしい人で、ナターシャ兄弟を本当の孫のようにかわいがってくれたという。義祖父と祖母の間には、ふたりの息子ユーラ、コーリヤとひとりの娘がいた。ナターシャは1956年に祖母の家から約4キロ離れたクガナーヴォロク村で生まれるが、すぐに弟が生まれたこと、父親が酒飲みだったことなどの理由で祖母の元で育つ。ナターシャは、あまり年変わらないこの叔父・叔母たちと兄弟のように育った。

01 これは家族に伝わるもので、すべては祖母から始まったようです。もしかしてそれ以前かもしれません。祖母は2歳の時に母親を亡くしましたから。祖母の継母のことは私も覚えています。祖母は孤児になり、そこからすべてが始まりました。私にはよくわかりませんが、そうってしまったのです。祖母の父親はとても厳しい人でした。以前どこでもそうだったように大家族で住んでいました。

02 以前は徒歩で放牧したものでした。祖母はシベリアまでも家畜を追って歩いたそうです<sup>6</sup>。木材にする木も切りに行きました。このイコン（聖像画）は祖母がシベリアのどこかから持ち帰ったものです。祖母が言うには何人だったか、たぶん6人だったと思います。リーダーの他はみんな若い女の子でした。彼らは森で道に迷ってしまいました。長い間森をさまよい、どうしても出られず、もうみんな死ぬんだとあきらめかけていました。すると森の中で、おそらく以前礼拝堂があった場所に行き当たったのです<sup>7</sup>。そこら中草ぼうぼうで、丸太が転がっていました。一体何だろうと思って彼らは近づいてみました。するとイコンがいくつもあったのです。リーダーの男性が言いました。

「みなさん、ひとつづつ持って行きましょう。このままではイコンは朽ちてしまいます。もしかしたら神様がここから出して下さるかもしれません」。こうしてそれぞれイコンを取りました。祖母が取ったのがこれです。その後すぐに森から出ることができました。道が見つかったのです。祖母はイコンを持ち帰り、きれいに洗って一生大切にしました。

03 祖母は軍人に、つまり母の父親に嫁ぎました。母はムルマンスクで生まれました。母には妹がひとりいました。戦争（第二次世界大戦）が始まり、祖父は家族をペトロザヴォーツクに移しまし

た。祖母から砲撃にあった時のことを聞いたことがあります。岸から離れてまもなく（家族の乗った）船が砲撃にあい、みんな水に投げ出されて…その時この小さな妹は風邪をひいて死んでしまいました。戦争が終わってから村に帰り、大家族で暮らしました。

04 （祖父が戦死してから）祖母がいつどうやって祖母が2度目の結婚をしたかお話ししましょう。戦争が終わり、村に戻りました。コルホーズで働かないといけませんでした。男たちも帰ってきました。ヴァーシャ爺さん（のちにナターシャの義祖父となる人）が村に帰ってきた時、彼には妻とまだ幼いふたりの息子がいました。祖母は妻と仲良しでした。しかしこれは祖母の罪なのかそうではないのか…。（この妻を含む一部の女性たちは）戦後、もう子どもは産みたくないと言って、夫を一切寄せ付けませんでした。以前はそういうことがあったのです。しかしみんなまだ若かった。祖母は義祖父と付き合うようになり、のちに一緒に暮しはじめました。ふたりは丘の上に家を建てました。隣にはまだ古い家が建っていました。前妻とその息子たちは古い家に住んでいましたが、ふたりはそれにくっつけて新しい家を建てました。今ではもう玄関の間以外何も残っていません。

05 ここからすべてがはじまりました。ここで敵意が生まれたのです。【I：その家族でですか？】私は祖母の元で育ちましたが、私が覚えている限り、カーチャ叔母さん（義祖父の姉妹）はいつも祖母を罵っていました。いつも、カーチャ叔母さんが何かしているのではないかという不安を感じていました。私は覚えているのは、祖母が朝起きて雌牛を外に出します。するとたちまちふたりは村中聞こえるぐらいの大声で怒鳴り合いを始めます。祖母が家から物を投げ捨てます。カーチャ叔母さんは、いつもこっそり私たちの家に何か置いていましたから<sup>8</sup>。彼女はどうしても黙ってうちのそばを通ることができませんでした。うちのそばを通る時には、祖母を罵らずにはいられませんでした。一生そんな感じでした。

06 祖母の家には庭があって、義祖父が窓辺に木を植えていました。そのうちの一本の白樺がいつも軋んでいました。白樺を掘り起こすように何度も人に言われました。根元に呪いがあると言うのです<sup>9</sup>。その木がだいぶ大きくなってから電気が引かれることになり、祖母の息子のコーリヤが枝を切り落としました。するとたちまちカーチャ叔母さんは盲目になりました<sup>10</sup>。手術のために病院に行ったりしましたがどうにもならず、半盲目で残りの人生を過ごしました。義祖父が亡くなる時、カーチャ叔母さんは初めて家に来て義祖父とお別れをしました。義祖父はとても穏やかな人で争いを好まず、「頼むからけんかはやめておくれ」といつも言っていました。義祖父が亡くなったのは私が2年生の時でした。ひどく寒い冬でした。

07 コーリヤを最後に見た時、私は友達と一緒にでした。私たちが歩いていると、彼がトラクターで通りかかり、私に手を振りました。その時なぜか、この人を見るのはこれが最後になるだろうという予感がしたのです。コーリヤが行ってしまったので私たちはまた歩き出しました。春、3月8日の祝日<sup>11</sup>前で、もう雪は解けていました。私たちは墓地まで行きました。村の墓地にです。なぜそこに行ったのか、未だに説明が付きません。現在彼が葬られているお墓に行ったのです。そこでまた何か不穏なものを感じて、恐くなって走ってうちに帰りました。わけの分からない恐怖を感じま

した。

08 コーリャがトラクター運転手としての訓練を終えたのは 17 歳の時でした。軍隊に入るまでの期間、村で働くことになっていました。彼は何かを感じていたようです。夢を見たらしいのですが、それがどんな夢だったか、ヴァーシャおじさん（隣人）に聞いてみて下さい。コーリャは決して誰にもしゃべらないようにと言って彼に話したのです。【I：コーリャが溺れるという夢ですか？】ええ、何かそういう夢です。ところでコーリャはいつも私たちに言っていました。「僕はすごく興味があるんだ。湖の底まで行って、湖の中を全部見れたら。どんなおもしろいものがあるか、見てみたいよ！」

09 【I：あなたのお祖母さんが私にこんな話をしてくれました。コーリャが溺れ死ぬ前に昼間横になっていたら、突然窓をたたく音がしたらしいです。「そこにいるのは誰？」と尋ねると、突然大きな大きな頭が大きな窓全面をふさぎました。もじゃもじゃの水の主<sup>ぬし</sup>でした。お祖母さんはギョッとなりました。その時「何しに来たんだ？」と尋ねていたら、水の主<sup>ぬし</sup>は答えていたでしょう。そして「元いたところに帰れ」という呪術的な文句を言っていたら、水の主<sup>ぬし</sup>は立ち去ったでしょうに。または未来に起こることを教えてもらうこともできたかもしれません。つまり、予兆はあったのです。それからもうひとつ夢に関してです。サーシャ・ムィシキン（ナターシャの祖母の兄弟）が溺れ死ぬ前、スハーノヴァ（よく知っている近所のばあさん）は、知らない男たちがやって来てこんなことを言う夢を見たらしいです。「湖には良い働き手がいないんだ。働き者を補充しなきゃならん」。そしてサーシャが溺れたのです。】サーシャはとても働き者でした。【I：サーシャとコーリャには共通点があります。酒を飲まずによく働くところです。彼らはとても早く、たくさん働きました。まるで何かに急かされているかのように。まるで、人生がもうあまり残されていないかのように。】ええ、ふたりは親戚ですから。【I：酒飲みは水の主<sup>ぬし</sup>の働き手になることはないと言われています。酒飲みはこっちでもあっちでも用無しなんです。こういうことは 40 年に 1 度起こります。ヴォドロゼロ湖には水の主<sup>ぬし</sup>がふたりいるのですが、それぞれが（犠牲者を）自分のものにするのです。私は本で読んだのですが、それによると、もし人が溺れ死んだら 40 年間はその魂は水の主<sup>ぬし</sup>のところにあるらしいです。でも 40 年経ったら次のサイクルがあるのか、また地上に戻るのか、神の元に召されるのか、またはどこかに行かされるのかわかりませんが、魂は水から出ないといけません。するとまた別の人が溺れることになります。また働き者で酒を飲まない人が選ばれます】。うちの家系は御覧のように、男はみんな溺れて死んでます。【I：その通りですね。】（祖母と住んでいた）この家はいつも何か不気味な感じがしました。特に「ゴールニツァ」と呼ばれていた部屋と屋根裏で……。そこには何か魔物が住んでいました。私は今でもこの家の屋根裏を見ると背中に何か感じます。【I：誰かが見ているような感じですか？】ええ、何かいやなものがあるのです。祖母と一緒にその足音を聞いたことだってあります。誰かが天井を歩いているみたいな音でした。

10 祖母は普段から自分で水汲みをしていました。なぜならコーリャは誰の頼みも断らないやさしい人で、当時トラクターの技術を持っている人は少なかったですし、何か運んでほしいと頼まれる

といつも手伝っていたからです。この人には薪を、あの人には干草をとという具合に。それで時間が無いから、祖母はいつも自分で水汲みに行っていました。春のことで、まだ雪が残っていました。その日は彼が水汲みに行きました。水汲みから帰ったコーリヤが言いました。「お母さん、見て！ そこら中に灰が撒かれてる！」道と氷にあけた（水汲み用の）穴の周りが灰だらけ<sup>12</sup>だったのです。祖母はもう彼を水汲みに出しませんでした。祖母はこれはカーチャ叔母さんの仕業だと言っています。たぶん彼女の罪です。【I：お祖母さんへの呪いがコーリヤに行ったということですか？】そうです。カーチャ叔母さんは祖母が水汲みに行くと思っていたのに、彼にかかってしまったんです。

以下が、灰が撒かれ、奇妙な夢を見るという出来事があってまもなく起こったことである。

11 うちの犬が一晩中遠吠えしていました<sup>13</sup>。コーリヤはいつもこの犬を連れて行ったのですが、その日は置いていきました。彼はどうしても行きたがりませんでした。氷が悪いと言ったり病気になるったりして。何かを感じていたようです。(氷の張った)湖を渡って4トンの塩を運ぶ仕事でした。漁師が向こうで取った魚が腐らないように、塩漬けにするための塩です。当時、塩を運ぶヘリコプターは飛んでいませんでした。出かける時にコーリヤは言いました。「帰りは道を通らず、違うところを通って帰るよ」。もし轍に沿って走っていたら溺れることはなかったでしょうに。【I：そうですね。】帰りはもう日が暮れていました。近くの村の人は見ていました。トラクターのモーター音が突然聞こえなくなり、ランプが消えるのを…。【I：どのあたりですか？】コスコサルマ村のあたりです。塩を運んだ帰り、コーリヤはひとりの女性のために干草を積んでいました。行きは彼女は怖がって運転台に座りませんでしたが、帰りはみんながそこに座るよう言ったので彼のそばに座っていました。トラクターが突っ込んだ時、他の人は飛び降りましたが、ふたりは取り残されました。女性が見つかったのは10日後、コーリヤが見つかったのは15日後でした。

12 当時私は6年生でした。1970年のことです。つらかったです。家ではみんな泣いていました。私にとっても大きな喪失でした。祖母が納屋で唱えごとをしたり、何かしたり、彼が見つかるように何者かに呼びかけていたのを覚えています<sup>14</sup>。以前村ではどれほど多くの男たちが溺れ死んだことでしょう。私は覚えています。岸に行って水の主<sup>ぬし</sup>か他の何者かに呼びかけているのを。溺死者が岸に流れ着いた時のことも。コーリヤのためにも何かが行われ、その後見つかりました。遺体を返してくれるような存在がいたのです。まず女性が見つかりました。同じ場所で彼女の夫も（以前）溺れ、父親も溺れ、彼女自身も溺れて5人の子どもが残されました。潜水夫に発見された時、コーリヤは湖底の泥の中で助手席の側に立っていました。女性を助けようとしたのでしょうか。でも彼女は彼がひとりで逃げると思ったのかかもしれません。彼の場所に座っていました。コーリヤは立ったまま、血が出るほどきつく唇を噛みしめていました。遺体が運ばれてきた時、まだ血が滴っていました。

13 ところで子どもの頃、私はとても長い髪をしていました。当時、ボロニアリボン<sup>15</sup>がはやって



いて、私もこのリボンをつけていました。コーリャが引き上げられた時、みんな船着場に走って行きました。遺体は防水布で包まれていました。みんな近寄りましたが、誰にも見えないようになっていました。でも私はとても好奇心が強く、怖いけれど好奇心が勝ったのです。覗き込んで見ました。誰も通さないようになっていたのですが。さて、検死のために遺体をブードシ<sup>16</sup>まで運ばないといけません。何かで手足を縛るよう言われました。手はもう何かで縛られていましたが、道中ぐらぐらししないように足も縛らないといけません。その時、祖母の姪のドゥーニャが私の髪からリボンを取ったのです。この時のことははっきりと覚えています。私のリボンで遺体の足が縛られました。私は何も言えませんでした。リボンが惜しいからだと思われるかもしれないからです。私は黙っていました。親戚はみんな泣いていてそれどころではなく、誰も気づきませんでした。誰か忘れましたが女の人が、そんなことはしてはいけないと言ったのですが。【I：そのとおりです。それはいけません。】

14 彼が葬られてからどんなに苦しんだことでしょう。言葉では言い表せません。経験した者でないといわからないでしょう。春になったとたん、私は14歳でしたが、自分の居場所が見つけれなくなりました。自分に何が起っているのか全く分かりませんでした。彼が死んで1年経っても、学校から帰ってご飯を食べていると気分が悪くて悪くて、今にも気が狂うんじゃないかという感じなのです。胸が破裂しそうで、押しつぶされそうで。その時から私の頭痛が始まりました。それはそれはひどい頭痛でした。13年間も苦しめられました。生きるに生きられず、死ぬに死ねないという状態でした。私が結婚して長男を生んでからも、コーリャはどこにいても私を呼び、夢に出てきました。家には全くいることができませんでした。特に納屋には入れませんでした。ものすごい恐怖を感じるのです。私は未だにお墓に立つのが怖いです。お墓に行くと彼が夢に出てきます。彼が死に装束で横たわっている夢を見ると、決まって悪い事が起こるのです。誰かが死んだり…。

【I：家族にですか、それとも村にですか？】家族にです。彼は死んだ人をみんな私の所によこしました。死んだ人はみんな私を呼びに来ました。彼は私を、自分の所に連れて行きたがっていたのです。

15 でもそのリボンは後になって見つけました。【I：見つかったんですか？】見つけました。私は何もわかっていませんでしたが、リボンが遺体と一緒に墓に入ってしまったなくて良かったです。

【I：もしそうならあなたは生きていないでしょう。】そしてもし良い人が助けてくれなかったら、ここにはいないでしょう。神様はやはり私を助けて下さっているのです。私は祖母の家の周りを箒で掃いていました。その時にリボンを見つけたんです。しばらく見て、拾わずに捨ててしまいました。【I：素手で触りましたか？】覚えていません。見つけたことだけは覚えています。でもたぶん手にとって見たと思います。多分、手にとりました。【I：でもそれは、もうそんなに危険な物ではありませんね。リボンを見つけてから頭痛は消えましたか？】いいえ、のちにある人が治してくれるまで、彼の死後12年以上も頭痛で苦しみました。私は今でも頭痛持ちです。でも当時とは何か異常でした。生きるに生きられず、死ぬに死ねないという状態でした。【I：(ナターシャの頭の両

脇に両掌をかざして) 頭はちゃんとあります。指を刺すような感覚がありますから。私は以前、帽子に呪いをかけられた女性に会ったことがあります。頭に手をかざすと、あなたの場合は指を刺すようなものを感じますが、その人は空っぽなのです。まるで頭なしで生きてるような感じなんです。】私はさんざん苦しめられましたから、そのせいかもしれません。【I：全く正常です。】

16 コーリヤの葬式の時、ドイツで軍務に就いていた彼の兄のユーラが帰って来ていました。さて、墓地でのお別れでお辞儀した時のことです。ユーラの帽子が墓穴に落っこちてしまったのです。

【I：何ということ！】これは恐ろしく縁起が悪い、帽子を拾ってはいけなとみんな言いました。

【I：ひどく悪い。】しかし彼は軍人です。どうやって帽子なしで軍隊に帰れるでしょう？ そんなわけにはいきません。墓穴に降りて帽子を拾う羽目になりました。彼はコーリヤの後を追いました。

【F：亡くなったんですね？】殺されたんです、レニングラードで。ひどい殺され方だったようです。彼にもたくさん（呪いが）かけられていました。彼には妻がいたのですが、その叔母は何でも知っていました。レニングラードに住むオールド・ミスでした。彼の葬式に行った時…【I：妻の叔母が呪いをかけていたのですか？】そうです。すっかりわかったんです。

17 祖母はコーリヤを亡くしてから、家にいられませんでした。ウクライナにいる娘の所にずっと行っていました。でも祖母はここにもそこにも、どこに落ち着くこともできませんでした。泣いてばかりいました。氷が遠ざかっていく頃、祖母は水辺に行き、顔を洗いました。そして目を患いました。私は当時幼稚園で働いていて、子どももまだ小さかったのですが、何度も病院にお見舞いに行きました。この時助けてくれたのが、プチツェファーブリカに住む女性でした。彼女は獣医で教育もありました。水を伝わってきた丹毒にかかったんだと言われました。誰かが祖母に丹毒を送り込んだのです。もう少し早ければ治せたでしょうに。こうして祖母は盲目になりました。祖母は泣き続け、一生息子たちを恋しがっていました。

ここまでの語りで、カーチャ叔母さんが祖母にかけようとした呪いがコーリヤにかかって彼は溺死し、それがナターシャの恐ろしい頭痛の原因となり…という具合につながっている。ナターシャの母親にもカーチャについて尋ねたところ、彼女は我々一家をめちゃくちゃにしたが、神罰によって盲目になり、その息子も盲目になり、嫁は気が狂ったと語った。

#### 4-3 子どもの時代の出来事——犬の乳首

18 子どもの頃のことでこんなことを覚えています。村では子どもはみんな、パンにマーマレードを塗ったものを持って遊びに行ったものでした。ある日大勢でトロフィーモフ家に遊びに行くことになりました。みんな手に手にパンを持って歩いていきます。ところがトロフィーモフ家の大きな犬が私のパンをパクリとやって、鼻をバリッとひっかいたのです。鼻から血が出て、おかしい光景ですが、実際はおかしいなんてもんじゃありません。その家の子が私を呼びました。「入っておいで、お婆ちゃんが血を止めてくれるから」。そのばあさんは何でも知っていました。悪い事もたくさんしました。全く恐ろしいばあさんで、みんな怖がっていました。

19 私がもっと小さかった頃、夜中に目をあけると、そのばあさんが私の上で何か唱えていたのを覚えています。私は夢遊病みたいに夜中に飛び起きて走り回る子どもでした。何かを怖がっていたのか、もしかしてイスプグ<sup>17</sup>だったのかもしれませんが。わかりません。でもその時は（ばあさんの呪文のおかげで）すっかり治りました。

20 そのばあさんが（犬に引っかかれた時）何をしたと思います？ 傷からは血が出て、私は泣きわめいていました。まだ小さかったものですから。【I：誰だって泣くでしょう。】ばあさんはタバコから紙を一枚引き抜き、広げて唾をつけて傷口にあて、十字を切りました。すると<sup>いぼ</sup>疣ができたのです。こことここと（鼻の上下左右4箇所）十字に疣ができたのです。触ると痛いですし、ひどく醜いので、私は嫌でたまりませんでした。学校では男の子が、疣を見てははやし立てました。

21 コーリヤが溺れる前かその春のことだったか、そのばあさんが亡くなりました。彼女はなかなか死ぬことができませんでした。彼女が死んだ夜、私は妹と同じ部屋で寝ていました。すると真っ暗闇の中でもものすごい強い風が吹いて煙突がうなり、煙突の蓋が開いたのです。私は怖くて怖くて。

【I：まさか開くなんて！ そんなことができるのは呪術だけです。】必死で母を呼びました。母は起きて来て言いました。「一体何をわめいているの、気違いみたいに？」「お母さん、私とっても怖い！」次の日の朝、顔を洗った時にはまだ疣はありました。ばあさんはちょうどその時間に死にました。朝には疣はあったのです。学校へ行きました。すると友達と言うんです。「ナターシャ、あんたの疣はどこにいったの？」私は顔をなでてみました。見て下さい、全然跡形もないでしょう？

【I：消えたんですね！ 何にもありません。ばあさんが死ぬ時、自分の呪いを持って行ったんですね。】突然消えたんです。（他の）ばあさんたちの所に行ってそのことを話すと、「犬の乳首」を付けられたんだと言われました。私を引っかいた犬の乳首を付けられたんです。彼女は悪いことをたくさんしたせいで死ぬことができませんでした。魔物が受け入れなかったからです。【I：それで呪いを解かざるを得なくなったんですね。】ええ、魔物が呪いを解くよう言ったのです。「お前に何でナターシャが必要なんだ、あんなことではいけなかったのに！」って言って。煙突がうなって蓋が開いたのはそれだったのです。【I：信じられない！】私は大喜びしました。疣がなくなったなんて信じられなくて、鏡を見て泣き出したぐらいです。私は友達と疣を探しまわりました。本の間や机の中も見ましたが、どこにもありません。一体どこに消えてしまったのでしょうか？ 訳がわかりません。朝には確かにあったのですから。

#### 4-4 ナターシャの結婚生活——姑の呪い

ナターシャが8年生の時のことである。彼女は男の子に人気があったが、誰のことも相手にしていなかった。ところがクガナーヴォロク村の船着場で友達と遊んでいる時、ひとりの若者がふざけて彼女をつかまえ、頬にキスした。ナターシャはひどく驚き怯え、キスされてしまったからにはもう誰のところにもお嫁に行けないと思い込み、これをきっかけにふたりの友情がはじまる。心臓病のせいで彼が母親に愛されていないことを知ったナターシャは深く同情する。18歳（1974年頃）で長男を妊娠するまで、ふたりは幸せな交際を続ける。この間ナターシャは8年生を終え、医療専門学校の試験を受けている。試験には失敗し

てひどく落ち込むが、幼稚園で仕事を見つけてしばらく働いている。のちにペトロザヴォーツクの別の専門学校に入り、卒業して上記の若者と結婚することになる。

ナターシャと姑の不和は、単なる嫁姑関係ではない。ナターシャはクガナーヴォロク村出身であるという理由で姑に嫌われたらしい。姑は他所出身の嫁がよかったのである。姑はボスチロヴォ村出身で、ナターシャが結婚した当時すでにクガナーヴォロク村に移っていた。姑と元々クガナーヴォロク村に住んでいた者との間にトラブルがあったことが想像される。

22 私の結婚生活がどんなだったかというと、これにはすべて姑がかんでいます。結婚式で（姑に呪いを）かけられたようです。私は馬鹿なことをたくさんしてしまいました。以前はこういうこと（呪術）は信じていませんでしたから。どうして私たちはこうなのでしょう？ 【I：そういう時代だったんですよ。】花嫁衣裳を用意していたのですが、式当日まで姑はそれを自分の手元に置いておくよう要求しました。【I：それだけは絶対に駄目です。その衣装に（呪いが）かけられていたんでしょう。針か何かが刺してありませんでしたか？<sup>18</sup>】わかりません。気をつけて見ませんでしたから。色んなことが起こり始めました。あの時呪いがかけられたようです。妊娠している時にかけられると、呪いは子どもに行ってしまいますよね。【I：ええ。】争いが絶えず、私には悪いことばかり起こるようになりました。いったい何年苦しんだと思いますか？ 私の道はどこもかしこも閉ざされていました。仕事も見つかりませんでした。姑は私たちを嘔み殺すかのようでした。手紙を書いてくるのですが、5枚の便箋に延々と脅し文句が並んでいました。「絶対に別れさせてやる、あんたたちは絶対に一緒に暮らせない」って。

23 産院でのことですが、私は息子のために新しい産着を揃えていました。それなのに姑と夫の姉は私から子どもを取り上げて、すっかり着替えさせてしまいました。あんまり古びて色あせたボロだから恥ずかしかったです<sup>19</sup>。（産院から出た後）彼らは私に子供用石鹸を持って来ました。1975年当時は、子供用の石鹸だけでなく何もない時期でした。【I：物不足でしたから。】私は母乳で育てていました。私は（それが呪いだということに）全く気づきませんでした。夫の姉から石鹸を手渡されました。私は受け取って置いておきました<sup>20</sup>。【I：石鹸箱には入っていませんでしたか？】入っていませんでした。【I：それは良かった。】良かったじゃありません。その晩私は意識不明で病院に運ばれたんですから。胸の病気でした。【I：ナターシャ、もし石鹸箱に入っていたら、あなたはもうあの世にいるところでしたよ<sup>21</sup>。】姑たちはあらん限りの方法で私に危害を加えてきました。手術をしましたが、何があったと思います？ ただの乳腺炎なんかじゃありませんでした。胸の内部にフルンケルが、つまり腫れ物が出来ていたのです。【I：北ロシア、ヴォログダ州ではこういうのを「瘤を据える」といいます。まあこれは外側にできた腫れ物のことですが。】きっと姑たちの仕業です。退院する時、医者に（呪術を知っている）ばあさんを探すよう言われました。私の胸は奇妙な状態でしたから。穴がいくつもあって、押さえると膿が流れ出します。この時は私たちの寮のすぐそばに住んでいた、親戚のドゥーシャ婆さんが助けてくれました。彼女は呪文を唱え、炭で（傷口のまわりを）ぐるっと書いてくれました。「ナターシャ、もう切ってしまってるから効くかどうかわからないけど」と言っていました。効きました。のちにこの腫れ物は目とかあちこちにできまし

たが、その時も治してくれる人がいました。

24 息子は3回死にかけました。(呪いが)息子に行ったようです。息子は死んでいてもおかしくなかったのですが、その時も神様が(良い人を)送って下さいました。父の姉妹のヴェーラ婆さんです。彼女も寮の近くに住んでいました。いい婆さんで人助けをしていました。息子は腐敗症、つまり血の病気で死にかけていました。集中治療室で1日中点滴がつけられていました。私は泣いて、どうか命だけはと神に祈っていました。医者にはこう言われました。「あなたはまだ若い。子どもはまた産めるでしょう。息子さんのことはあきらめて下さい」。私は18歳でした。これはみんな姑がしたことなのです。【I:私もそう思います。】ヴェーラ婆さんは(呪文を唱えた)水を用意して言いました。「医者の言うことを聞いちゃいけない。この水で子どもを洗ってやりなさい、この水をかけなさい」。医者には非難されましたが、私は言われた通りにしました。【I:塩でなく水だったんですね。】ええ、瓶に入った水でした。言われた通りにすると、息子はとても長い間眠りました<sup>22</sup>。

【I:長く眠ったのは良かったです。】次の朝、女医は息子がまだ生きているのに驚いて言いました。「どうということ? もうとっくに霊安室だと思ってたわ!」こういうことを経験させられたのです。

25 姑はヴォロビーハ(村で有名な呪術師)と仲良くするようになりました。彼女はとてもよく知っていました。夫の実家へ行った時、向こうではもうお茶が用意されていました。姑は「あんたはここに座りなさい、あんたはそっちに」という具合に席につかせました。ヴォロビーハも座り、私たちを見ました<sup>23</sup>。それ以来、夫が暴れるように、私を殴るようになったのです。姑はヴォロビーハにたくさん贈り物をしていました。姑は私たちを別れさせたがっていて、ヴォロビーハはその頼みを聞いていたようです。夫はそこでお茶を飲みました。(しばらくして)家に帰りました。ところが家に入ったとたん、彼は靴を脱いでその靴で私を打ち始めたのです。【I:殴ったんですか?】敷居のところから私に飛びかかって来たんです。まるで野獣でした。ああ、一体どれだけ呪われ、苦しめられたことでしょう! でも神様が私を守って下さいます、助けて下さいます。【I:神は正しい、助けて下さる。】もちろん誰にでも罪はありますし、私も罪深い人間です。でも誰かに悪意をもって何かしたことは一度もありません。だから助けて下さったのでしょうか。今でも助けて下さいます。しかし多くのことを耐え忍ばなければなりませんでした。

26 息子の話はまだ続きがあります。息子が一命を取りとめ、もうすっかり良くなった頃のことです。姑がうちに来ました。その時何を息子に食べさせたんでしょう? 息子の耳から何かが流れ出すようになったのです。息子が学校にあがるまでに、私がどれだけ色んなばあさんのところに通ったと思います? 【I:ひどい *いれき* (золотуха) ですか?】何だったかわかりません。医者も誰も治せませんでした。耳から紐のように出てくるのです。雪がとけて消えるまで、引っ張ると腐ったものが紐になって出て来ました。あんなものは見たことがありません。引っ張っても引っ張っても紐のように出てくるのです。【I:雪が消えるまでですね?】ええ、すると自然に治ります<sup>24</sup>。【I:これもあなたの家の誰かがしたんでしょう。】姑の仕業です。うちに来た時に息子に何か食べさせたのです。私は台所にいたので見ていませんでしたが。私は治せる人を探し回りました。そんな時、

また神様が助けて下さったようです。リボンの時に助けて下さったのも神様でしたが。オーリャばあさんという人がいて、彼女もとてもよく知っていました。(ナターシャはオーリャばあさんが病気で不自由していた時に偶然知り合い、彼女が呪術を知っているとは知らずに親しくなる)。ばあさんは私に尋ねました。「なんであんたの息子はいつも帽子をかぶってるんだい?」「耳が痛いんです」。その時は何も言いませんでしたが、次に会った時に言いました。「誰かがあんたの息子にいいことをしてくれたようだね。あんたの姑は魔女だよ。小さな子どもにこんなことをするなんて。神罰が下るだろうよ」「どういうことですか?」当時こんなことは信じられていませんでした。こういうことは隠されていたのです。【I：ソビエト時代ですから。】彼女は言いました。「何かの脳味噌を使ったようだね。鳥の脳味噌かもしれない。脳味噌に何かして子どもに飲ませたんだ。子どもの脳味噌がすっかり流れてしまうように」。ぞっとしました。どんなに心配したことでしょう。オーリャばあさんは息子を治してくれました。

27 それからばあさんは私をじっと見て言いました。「あんたはひどい頭痛持ちだね」「そうです、ひどく痛みます」。寮に住むようになっていましたが、そこでも(溺れて死んだ)コーリャが私を引っ張り、呼ぶのです。あんまり怖くて、部屋にいても廊下側の扉はいつも開けっぱなしにしているぐらいでした。次に会った時、聞かれました。「昨日はどんな夢を見た?」「コーリャがまた夢に出てきました。私を呼んでいます。もう耐えられません」「洗礼は受けているかい?」「いいえ」。私は教会に連れて行かれました。初めて教会に行ったのです。彼女は私に、まず死者のために蠟燭を供えるよう言いました。私は蠟燭に火をつけて供えました。コーリャが安らかであるようにと。ところがまるで誰かが吹き消したみたいに、死者のために供えられていた蠟燭がみんな消えてしまったのです。気味が悪くなって彼女を見ました。彼女は十字を切り、長い間何かお祈りを唱えていました。それから私に言いました。「すぐにお母さんに電話しなさい。向こうで食事をしてもらって、そこで使ったテーブルクロスをはらわずに、パンくずがついたままのを丸めて送ってもらいなさい」。私は母に電話しました。母も当時何も信じていませんでした。私はとても気分が悪くて、どうしてもそれが必要なんだと説明しました。母は言われた通りにクロスを送ってくれました。オーリャばあさんは私の服を脱がせて水とクロスの入った桶に座らせ、私を洗いました。上から下までお祈りで洗ってくれました。私につけられていたもの(呪い)を洗い流してくれたようです。もしかして死者を洗うような感じかもしれません。【I：違います。食事を並べたテーブルは教会の宝座と同様に聖なるものです。その聖性が移ったクロスで洗うのは、聖水で洗うのと同様の効果を持つんです。私はこれについては良く知っていますから。】それから彼女は教会で洗礼を受けさせてくれました。息子にも洗礼を受けさせるように言うのでそうしました。

28 その後すぐに夢を見ました。「夢を見たかい?」と彼女に聞かれました。他にも何かしてくれていたのかもしれませんが。私は特に信じていたわけではありませんでした。でも自分は信じていないとか、こんなことはばかばかしいとは言いにくかったので、言われた通りにしました。そしたらコーリャの夢を見たのです。コーリャは白いシャツ姿で、寮の窓からものすごい憎々しげな目で私

を睨みつけていました。憎悪の目で睨みつけて、そしていなくなりました。それ以来、彼は来なくなりました。私は少しずつ太って健康を取り戻しはじめました。

その後、このオーリャばあさんはナターシャに娘が生まれると予言し、その通りになる。夫はとても娘をかわいがった。ある時彼女は夫と共に娘をつれて夫の実家に行くが、またしても姑に呪いをかけられ、娘の目が腫れ上がる。医者に見てもらおうと、角膜にトラクターで走ったような筋がついていることがわかる。医者はなすすべがなかったが、オーリャばあさんは治療することができた。

#### 4-5 ナターシャの離婚——愛人の呪い、ジブシーの呪い、夫の呪い

夫に愛人ができ、彼が何年もナターシャと愛人の間を行ったり来たりしたことにナターシャは苦しめられる。以下はこの間の複雑な葛藤を物語っている。ナターシャは、自分たちを離婚させようとした人は複数いると考えている。姑、夫の愛人、そしてジブシーたちである。隣人たちの妬みも関係しているらしい。こうして、ふたりは愛し合っていたのに呪いによって引き裂かれたという話になっている。

29 長男の耳の病気の時はオーリャばあさんが治してくれましたが、娘が耳の病気になった時はマルーシャばあさんが治してくれました。いいばあさんでした。妹の同級生の祖母にあたる人です。一度しか会ったことがありませんが、その時彼女は言いました。「夫があんたにひどいことをするんだね」「そうです、ひどい暮らしです。いつもいつもひどい仕打ちを受けています」「今晚うちに泊まっていきなさい。夜にお墓に行きましょう。夫がひどいことをしなくなるように、ずっとあんたのそばにるようにしてあげるよ。あんたは幸せになれるよ<sup>25</sup>」。私はどうして言うことを聞かなかったのでしょうか？ 別に急ぐこともなかったのに、聞かずに帰って来てしまいました。

30 私はまた病気になりました。オーリャばあさんは言いました。「ナターシャ、あんたの姑はどれだけひどいことをすれば気が済むんだろう！ あんたの写真が玄関の下に埋められている<sup>26</sup>。ところで姑の家の近くに森はあるかい？」「ええ、あります」「森に行きなさい。近くにひどく軋んでいる木があるはずだ。風もないのに軋んでいる木が。その木の下にあんたのすべての呪いとすべての不幸がある。行って切り倒しなさい。根元からすっきり。そしたらすべてが良くなるから。普通に生活できるようになるから」。私は言うことを聞きませんでした。【I：聞いておけば良かったのに。】若かったですし、何も信じてなかったんです。心の中で半分笑っていました。オーリャばあさんはこんなことも言っていました。「あんたの姑はいろんなことをしたけど、誰よりも自分の息子を害している。あんたは普通に暮らせるようになるだろうけど、息子は苦しむだろう」。その通りになりました。

31 アリョーナばあさん<sup>27</sup>は当時、「姑は自分の望み（離婚させること）を遂げるだろうが、良い死に方はしないだろうよ」と言っていました。後に姑は頭が変になりました。頭が変になって徘徊するようになったのです。魔物に呼ばれていたに違いありません。姑はそこ（森）をいつも徘徊していました。いつもそこで見つかりました<sup>28</sup>。

32 夫は私を愛していました。私はそう感じていましたし、彼は今でもそう言います。でもオーリャばあさんは、「夫はあんたを愛してる、でも同時に憎むようされている」と言っていました。その

通りでした。私の誕生日のことです。当時娘はまだ赤ん坊でした。姑はそれまで誕生日に何かくれたことなどなかったのに、その年は砂糖漬けのクラウドベリーを夫の姉妹に持たせてよこしました。私は料理を用意しました。当時まだ寮に住んでいました。さて、みんなで飲んで食べてしたのですが、夫の姉妹たちは誰もそのクラウドベリーに手をつけようとしません。その頃には私もちょっとは頭を働かせるようになっていました。食事中勧められましたが「今は欲しくないわ」と言っておきました。彼らが食べないなら私も食べません、ところが夫は食べてしまったのです。それでどうなったと思います？ 夫の目がだんだん異常に、気違いみたいになって、いきなりテーブルをつかんだかと思うとバーンとひっくり返しました。獣みたいになってしまったのです。夫は皿から鏡から食器棚からすべて割りつくし、一緒に撮った写真も全部破り捨てました。私は長男を連れて廊下に逃げ出しました。でも娘は家の中です。夫の姉妹はすぐに帰って行ったので、私たちだけが取り残されました。なぜこんなに野獣化してしまったのでしょうか？ 私は殴られて寮の廊下の端から端まで吹っ飛ばされました。痩せていてたったの 40 キロしかありませんでしたから。男の人が廊下に出てきてくれたのですが、夫を押さえることができません。私は裸足で逃げました。【I：そんな風に呪いをかけられるなんて聞いたことがありません。】私は夫に追いかけて寮の周りを逃げ回りました。どうしても娘に近づけません。その後、どうにかしてドアを壊してもらって娘を連れ出しました。夫は2階の窓から飛び降りてどこかへ行ってしまいました。後でオーリャバあさんに言われました。「食べてはいけなかったのに」。でもどうしろって言うんでしょう？ 「食べるな」なんて言えるわけがありません。私だって知らなかったんですから。

33 私は離婚届を出しました。もうこれ以上苦しめませんでした。でもどうやって生活すればいいんでしょう？ 私は保母として働こうと思いました。何とかして生活しないとイケません。夫は一週間帰ってきませんでした。一週間後に帰ってくると、冷蔵庫の食べ物もお金も全部持って行ってしまいました。夫はいつも私に言っていました。「お前を愛している、お前が誰のものにもならないように、まずお前を殺して自分も死ぬ」って。こんな状態でしたから、それは怖かったです。【I：ほとんど気違いだ。】彼が帰ってきたらどうしようと思いました。うちには錠がありませんでしたから、机でドアをおさえ、枕の下には金槌まで置いていました。彼は言いました。「自分は何をやるかわからない、これは魔女（姑）のせいなんだ。ナターシャ、これはみんなあいつのやったことなんだ。お前には言うまいと思っていたが、（実家に）帰った時、赤ワインを飲まされた。その瓶には塩か砂糖か、何かが底にたまっていた。それを飲んでしまったんだ<sup>29</sup>。お袋が、こういうのが店に売ってるって言うから」。姑はいつも、夫を私から引き離そうとしていました。夫も苦しみました。彼が出て行った時、私は彼を失うことに恐怖しました。もう生きていられないと思いました。そんな時にあなたが、ナジェージダ・ニコラエヴナ<sup>30</sup>のことを教えて下さったのには本当に感謝しています。彼女は私を助けてくれました。もし助けてくれる人がいなかったら、あの世に行っているところでした。私にも彼に対する「乾きの呪い<sup>31</sup>」がかけられていたようです。彼は好き放題していました。右に左に遊び歩いていました。しばらくして夫は我に返り、私に3人目の子を産むよう言い



ました。私を手放したくなかったのです。もう遊び歩かないと言うので言いくるめられてしまいました。

34 さて、夫と一緒に寮を出て引っ越してからのことです、家畜を飼うようになったのですが、それで妬まれることになりました。みんな、私たちの暮らしがとてもいいと思ったのです。私はいつも明るかったですし、子どもの躰も行き届いて、すべてがうまくいっていたからです。どれだけ邪視されたかわかりません<sup>32</sup>。

35 私たちは家が持てるようになったのをとても喜びました。もう寮住まいでなく、こんなに広くて、2DKでしたが。新居祝いをしました。ちょうどその時、新しいクラブがオープンしたばかりだったので、その女性（新居祝いの招待客のひとり）が言いました。「みんなでクラブに行ってみよう」。若いので連れだってクラブへ行きました。彼女に留守番を頼んで。その日は10月革命記念日でした。戻ってきた時、彼女は奥の部屋で寝ていました。子どもたちは眠らずに走り回っていました。彼女はソファを部屋の隅に移動させていました。まるで棺桶を置くみたいに。棺桶は部屋の隅に置きますよね。そのソファで寝ているのです。彼女は家に帰って行きました。次の朝、夫と掃除を始めました。すると何があったと思います？ 家には白いタオルがあったのですが、それに結び目が作られて部屋の四隅に置いてあるじゃないですか。タオルをほどくべきか、ほどかざるべきかわかりません<sup>33</sup>。私はがっくりして泣き出してしまいました。タオルを集めて大きい方の部屋でほどこしました。私たちはそこでは（普通に）暮らせませんでした。この家では朝の5時に（何者かに）揺さぶられて、家から飛び出したことだってあります。のちにひとりのザオネージェ（オネガ湖北部）出身の女性教師が、たぶん私を憐れんでくれたのでしょう、助けてくれました。彼女はウオッカを1本買ってくるよう言いました。それをザオネージェに持って行って、何かしたようです。ウオッカを家の四隅に注ぐよう言われました。ウオッカには呪文が込められていました。彼女が言うには、タオルの結び目は家の主（домовой）を苛立たせるためだったとのこと。結び目で壁をたたいて家の主を苛立たせ、家の主が私たちの暮らしを邪魔するよう仕向けていたのです。

36 私たちの間には以前から亀裂が入っていたのですが、夫は自ら出て行ったわけではありません。また（呪いが）かけられていたのです。前の家では姑にやられましたが、そこでは誰か私をとてども妬む人がいたのです。夫は遊び歩いていた。彼女（夫の愛人）も色んなことをたくさん知っている女で、そういうことをしていたようです。たとえば私が家に帰ると、剃刀が錠前とドアの取っ手に刺してあるんです。かと思えば何かが撒かれていたり。ある時は、それが最後で、彼が出て行った春のことです。畑の（垣根の）杭が雪の中から引き抜かれて、湿っている方を上にうちのドアに立てかけてあるんです<sup>34</sup>。ぞっとしました。私は触りませんでした。そこへ夫が仕事から帰ってきて、ぶつぶつ言いながら杭を捨てました。間もなく彼は出て行きました<sup>35</sup>。

37 その春は悪いことばかり起こりました。6年前のことです。職場ではリストラにあい、病気にもなりました。腕がこんな風に（力が入らなくてだらりとした感じに）なってしまったんです。この時はヴェーラ婆さんが私にオイルを作ってくれました。腐敗症で息子が死にかけた時に（呪文を

唱えた)水をくれた人です。彼女はオイルを作ってくれて言いました。「このオイルを(患部に)すり込んで犬に舐めさせなさい。野良犬に。もし犬が死んだら呪いだったってことだ」【I:「犬の老い」という病気です。】隣の犬が死にました。かわいそうなことをしました。でも私の腕は良くなりました。やはり呪いだったのです。【I:「犬の老い」です。もしも犬に移さなかったら、小さな子どもも墓場行きにするような病気です。】

38 夫が出て行った時、もう生きていられないと思いました。私は首吊り紐に引き寄せられました。そんなことしたいわけではないのに、「やってしまえ」と(魔物が)ささやくんです。紐に引き寄せられる時には、<sup>グエーニク</sup>枝箒を輪の部分に差し込むと良いと言います<sup>36</sup>。私はそうせずに自ら戦う努力をしましたが、でも彼なしには生きていけませんでした。私は自分の居場所が見つけられませんでした。家からは追い立てられるようでした。どこへ行ったらいいのか分かりません。夜は街にいる妹のところに行って寝かせてもらいました。自分の家では眠ることも何もできません。村に帰れば何ともないのですが、でもしばらくすると、どこにいても耐えられなくなりました。生きるに生きられず、死ぬに死ねないという状態でした。うちに来た人はみんな言いました。「ナターシャ、あんたの家は死臭がするわ」って。ヤールグバのアリョーナばあさんがうちに来てくれた時には、私の苦しみはもう限界でした。彼女は言いました。「こんな家に住めるはずがない。だって死体が転がってるじゃないか!」彼女は何か唱えて円を描いて歩き、言いました。「床を洗いなさい、死者のいたところから外へ流してしまいなさい<sup>37</sup>」。私はその通りにしました。【I:死者のすぐ後に洗うというのはどうやることですか?】「どうやって死者のすぐ後に洗うのですか?」と私は尋ねました。四隅からドアに向かって、みんな出て行くように洗うのです。

39 アリョーナばあさんは後に、(初めて知り合いに連れられて彼女を訪ねた時のことについて)言いました。「あの時あんたはもう半分あの世に行ってたよ。もしあの時来なかったら、もうとっくにあの世だろうね」【I:あなたには3つの墓から取った土が後ろから投げられていたのですか?】<sup>38</sup>墓土が投げられていたのは夫の方です。アリョーナがそう言いました。彼が私や子どもたちに対して(心が)冷えるように、歩いている時に後ろから墓土を投げられたんです<sup>39</sup>。実際彼は全く私たちからそっぽを向きました。【I:あなたには何がされていたんですか? 半分あの世だったんでしょう?】まだ夫が家を出て行ってしまう前から、夫はちよくちよくあの酒飲み(夫の愛人)と会っていました。ふたりは私をこの世から消すことに決めたようです。なぜかという、彼女(愛人)が後になって夢に出てきましたから。しかし夫は愛人を憎んでいました。「名前を聞くのもいやだ」と言っていました。

40 (初めて訪ねた時)アリョーナは私をひどく罵りました。「あんたには頭がついてないのかね? 自分を誰と結びつけたんだい? あんたは(自分で自分を)滅ぼしたんだ。彼とは子どもをつくるんじゃないで、走って逃げなきゃいけなかったのに!」私はアリョーナに夫の写真を見せました。彼女は夫をひどく嫌いました。「(彼の顔は)見るに耐えない。ああ、あんたにはどれだけ(呪いが)かけられていることか!」彼女は私にとっても良くしてくれました。息子のこともかわいがってくれ

て、何度も助けてくれました。

41 彼が出て行った時は本当につらかったです。私は息子たちを連れてアリョーナのところに行きました。下の息子はまだ8歳でした。彼女は言いました。「あっちの方(愛人)がいいっていうなら、ほっとけばいいじゃないか。それともあんなクズが惜しいのかい？ まだ苦しみ足りないとも言えるのかい？」今となればわかりますが、当時はアリョーナにひどく腹を立てました。私を助けてくれなかったのです。いつも夫を取り戻してくれたのに、その時は家庭を取り戻すのを助けてくれなかったのです。彼女は言いました。「あちらで恐ろしく強い『乾きの呪い』がかけられている。ベッドと風呂<sup>40</sup>に。もし取り返そうとしたら、夫は耐えきれずに死んでしまうだろう。そしたら彼はあんなのものにも、愛人のものにもなくなっちゃうよ」。

紙面の都合上省略するが、この頃ナターシャの隣人の息子が殺されるという事件が起こる。ナターシャはアリョーナばあさんに頼んで犯人探しをしてもらい、犯人のジブシー男性ふたりをつきとめる。アリョーナは犯人たちに悪いことが起こるように呪術をかける。しかしナターシャは、そのせいでジブシーに恨まれ、家庭を壊す呪術をかけられていると考えはじめる。

42 私を夫と別れさせようとした人は他にもいます。たぶんジブシーです。毎年春に(雪がとけた後)、私は熊手を持って家の周りを掃除します。自分の所もそうでない所もみんなきれいにします。ところがうちの部屋が面しているところには、どこもかしこも壁際に、毎年割れたガラスが撒き散らされているのです。【I:あなたの生活に傷をつけるためです。】そうなんですか。剃刀も見つかります。寝室の横と窓のところにありました。剃刀は戸口にも置かれていました。どれほどの不幸に見舞われたことでしょう！ 夫は3年間こちらとあちら(愛人宅)を行ったり来たりしていました。彼はうちへ帰って来ては泣いて私に頼むんです。「ナターシャ、助けてくれ。あそこに住みたくないのに足があっちへ行ってしまうんだ。俺がどんなに苦しいかわかるか？ 心は家にあるのに足はあっちへ行ってしまうんだよ！」

43 私は泣いてばかりいました。どうしても家に入れませんでした。(助けてくれる人を)探し回り、ありとあらゆる人を訪ねました。ジブシーの所にさえ行きました。仕事も失い、何もかもうまくいきませんでした。妹が見かねて、あるばあさんの所へ連れて行ってくれました。ばあさんはナイフで私の手をこんな風にして言いました。「あんたに道を開いてあげよう。せめて仕事が見つかるように」。その後、すぐに仕事が見つかりました。

夫が愛人の元に去ってからは、ナターシャは3人の子どもたちと暮らした。離婚当時、下の息子はまだ8歳だった。子どもたちはナターシャが幸せになれるように、再婚を勧めている。離婚後、ナターシャは数人の男性と知り合うが、いつも何かに邪魔されているような感じがしてうまくいかない。しかし最近新たにひとりの男性と知り合い、いい感じだと言う。彼女は幸せになれることを夢見ている。しかしやはりどうしても乗り越えられないものに遮られていると感じている。

離婚後、子どもたちにも悪いことが次々と起こった。長男は結婚して子どもがひとり生まれたが、数年で離婚。娘もまた離婚し、その後全く男性が寄り付かない。娘自身苦しんでおり、自暴自棄気味だという。ナターシャは娘の頼みで、高額のコストを取る超能力者のところにも行っている。

44 孤独の呪いはまだ誰も私から取ってくれません。一体どれだけの人の所に通ったことでしょうか？（呪術を知っている人のうちで）私が行かなかった所はありません。（孤独の呪いは）私から子どもにいつているようなのです。夫は後になって、この呪いをかけたのは自分だと告白しました。夫は3年間行ったり来たりしていました。最初、私は家庭を守ろうと思いました。子どもには父親が必要です。それに私自身、彼なしには生きていけなかったのです。私はドレヴリャンカ村に彼を探しに行きました。探して、（帰って来てくれるよう）頼みました。私は村中探し回りました。連れ戻すためにです。それなのに彼は私をまるで犬でも追い払うように、憎々しげに蹴飛ばしたのです。私をあざ笑い、侮辱しました。私は自分を許すことができません。彼の前で一度、ひざまずいたことさえあるのです。【I：ナターシャ、誰を許すかって、まず誰よりも自分を許さないといけません。自分を許そうとしてみてください。少しは楽になるはずです。あなたは最初の間でも最後の人間でもないのです。これまでどれだけの人がこの世に生きたことか。】でも私は当時、彼に仕返しをしたいと思いました。本当です、彼に悪いことが起こって欲しいと思ったのです。【I：自らを許しなさい、許しなさい。まず自分自身を許すべきなんです。あなたは善良な人です。】

45 私は教会に行って、司祭様にすべて話しました。「夫からひどい仕打ちを受けたんですね」「そうです、ひどい仕打ちでした。つらかったです。でも夫なしには生きていけません、耐えられません。夫がいなくて家に入れません」「神はこれ以上あなたが耐えるのを良しとされなかったのです。あなたを哀れんで、夫から引き離して下さったのです。【I：素晴らしい司祭さまだ！】「待ちなさい。神が代わりに最良の人を与えて下さるでしょう」。私は尋ねます。「ではどうしてこれほどの痛みを耐えなければならなかったのですか？」「これらすべてを耐えるように定められていたのです」。私は時々教会に通いました。特に悪いことが起こる時にはです。うまくいつている時には忘れてしまうのですが。

46 子どもたちに悪いことが起こったのは残念です。娘は2年で離婚しました。息子の結婚式では夫は私に言いました。「結婚式なんかしても無駄さ。2年で別れることになるんだから」。息子夫婦は3年で別れました。全くうまくいなくなつて。最初はうまくいったけど、突然すっかりだめになってしまったのです。家でも悪いことが起こりました。後になって夫は私に告白しました。「許してくれ。クロシノゼロのばあさん（ひどく邪悪だとの評判の呪術師）の所に行って、おまえが俺以外の誰にも必要とされないようにしたんだ」。まさにその通りでした。彼は言いました。「いつか再婚できるなんて思うな。俺はおまえが一生孤独でいるようにしてやったんだ。そのために必要だったのはな、ナターシャ、砂糖2かけらと人参の葉っぱ、それだけさ」。一体それでどうやったのかわかりません。

47 （息子に悪いことが続いたので）ノーヴィエ・ペスキーのゾーヤ・ゲオルギエヴナ（3章で紹介した窓辺で水の主<sup>ぬし</sup>に手を振るばあさん）の所に行きました。彼女は柄杓に水を汲んで見ます。【I：そうなんです。彼女は蠟燭も何も使いません。柄杓に水を汲むと、すべての問題がすぐに見えるのです。日本の問題でもわかるぐらいです。】彼女は水を汲んで見ました。とたんに顔色を変えて、何

ともいえない表情をしました。「ゾーヤ・ゲオルギエヴナ、私に何か悪いものがあるのですか？」彼女は「ああ、何てこと、何てこと！」と言うばかりです。お祈りまで始めて、それから言いました。

「何とまあ、あんたには恐ろしい呪いがかけられている！」「孤独の呪いですね。知っています」「でも心配しなさんな。独りになることはないから。あんたのそばには誰かが立ってる。でも呪いは強いね。あんまり強くて、あんたの娘に落ちている」。娘は私のせいで別れてしまったのです。彼女は続けました。「娘に落ちた孤独は、息子にまで行ってしまった」【I：つまり（呪いは）女系でより強く伝わるのですね？】そのようです、母親から強く。私は尋ねます。「取ることはできますか？」彼女は何も言いませんでした。「後で」と言ったきりでした。私は言いました。「何か不穏なものを感じるのです。何かを感じるんです。うちではすべてが壊れていくし、すべてがうちから出て行く。何もかもうちから出て行くんです。いくら働いてもお金はいつもないし、私は病気ばかりです」「まだ言うつもりはなかったんだけどね、あんたのうちは蟲だらけだよ。あとで箒を持ってきなさい。家族みんなの靴に塩をひとつまみずつ入れなさい。そしたら私が解いてあげよう」。蟲は夫が最後にここに住んでいた頃にはもういたようです。家に入ると何かくすぐったい感じがしていたのです。今考えると、大量の蟲がウジャウジャと体を這っていたに違いありません。【I：蟲は目に見えないんですね。見えなくて良かった。しかし本当に恐ろしい！】ええ。でもどうして（超能力者の）ナジェージダ・ニコラエヴナやアリョーナばあさんは助けてくれなかったのでしょうか。一体誰がこんなことをしたんでしょう？ 【I：私は、ひとりの人間にすべてが見えるわけではないと思うのです。すべてを与えられるわけではないんです。】ひとりの人間にはあることが見えて…【I：他の人には他のものが見える、そうです。】ゾーヤ・ゲオルギエヴナはとても良くしてくれました。「私が生きている間はうちに来なさい。娘さんがうまくいくようにしてあげよう」と言ってくれました。

#### 4-6 溺死者の捜索

呪いは一種の生き物のようにとらえられている。祖母にかけられ、叔父コーリヤにかかった呪いは、彼が溺死した後にナターシャの妹に移ったという。以下では、妹の夫とその兄弟が溺死した際に、どのように遺体を捜したかが語られている。結局最後に、神の力で遺体は戻ってくることになる。

48 私の妹の呪いも（ゾーヤ・ゲオルギエヴナに）取ってもらいました。【F：妹さんに呪いをかけていたのは誰ですか？】溺死したコーリヤから妹に移ったのでしょうか。呪われた人が死ぬと、呪いは移る先を探しますから。妹は最近再婚しました。妹の最初の夫は溺死しました。兄弟のイワンと溺れたんです。4年前のことです。ふたりは実家の母親のところに三位一体祭<sup>41</sup>の前夜に帰っていました。この夜は決して誰も湖には出ません。ところが彼らは行ったのです。漁師はみんな陸に上がっていたのに。私に（ふたりが帰らないと）電話がかかってきました。風の強い日でした。たぶんどこかでエンジンが故障したのでしょうか。もうふたりは生きていないだろうという予感がして、背中に冷たいものを感じました。私は（超能力者の）ナジェージダ・ニコラエヴナに電話しました。彼女はなかなか答えようともしませんでした。「ふたりはもう生きていません」「見つかりますか？」

「ええ、見つかります。でも時間がかかるでしょう。見つかるといっても…これ以上何も聞かないで下さい。何も答えられません」。みんな探しに探しましたが、見つかりませんでした。あらゆることをしました。私の職場の准医師は、アイコンを湖に沈めるのがいいと言いました。母親は毎朝湖に紅茶を運びました。どれもこれも試しました。でもどうしても見つかりませんでした。

49 ところでヴォドロゼロにニーナ・イヴァーノヴナというばあさんがいるのですが、知ってますか？ 【I：ヴォドロゼロに？ 知りません。】良いばあさんです。じいさんと暮らしていて、もうかなりの歳です。人のためにたくさん良いことをしています。私は妹とニーナ・イヴァーノヴナの所に行きました。【I：何を教えてくれましたか？】彼女は「縄を用意しなさい」と言いました。ところが妹は、「怖い、そんなことできない。私に悪いことが起こるかもしれない」と言います。私だってもちろん怖いです。ばあさんは言いました。「怖がることはない。悪いことにはならないから」。

【I：悪いことが起こるはずありません。】彼女は言います。「ただ誰にも言わないように。すべてが終わったら言ってもいいけれど」。他にも何かしてくれていたのかもしれませんが。ばあさんは言うには、「ふたりは魔物に閉じ込められている。縄を用意して、人が通らないところに立っている木を選びなさい。誰かが縄を解くことがないように。さもないとあんたに悪いことが起こるよ。縄を木に巻いて結び目を作りながらこう言いなさい。『我は最も偉大なる、最も崇高なる悪魔の<sup>クマール</sup>辜丸を縛る、縛りあげる。〇〇を××で見つけ給え、彼を帰し給え<sup>42</sup>』」。すぐに行ってその通りにしました。私は心の中で言いました。「主よ、もし私がしているのが悪いことだとしてもお許し下さい、お救い下さい。一度にふたりの息子を亡くして苦しんでいる母親がいるのです」。結び目は1日ひとつです。もし見つからなかったら2日目にふたつ目の結び目を作って唱え、3日目に3つ目の結び目を作る。

【I：水の主<sup>ぬし</sup>には何もしないのですか？】しません。【I：悪魔にだけですか？】「最も偉大なる、最も崇高なる悪魔の…」【I：私なら怖くてできなかったでしょう。】怖かったです。でも私はみんながかわいそうだったのです。もし私に悪いことが起こるなら起こればいい、他の人が楽になるなら、と思いました。「彼（死者）は岸のすぐそばにいて、あんたたちみんなを見てる」と言われていたのですが、その通りでした<sup>43</sup>。3回これをした後すぐに妹の夫は見つかりました。私はイワンのためにもしましたが、いくらやってもだめでした。イワンが見つかったのは1ヶ月後のことです。母親が見つけて引き上げました。もう疲れて誰も探すのをやめていました。見つかったのはイワンの日（6月24日）でした。【I：何と！ イワンの日に見つかるなんて。】ええ、イワンの日に岸に流れ着いたのです<sup>44</sup>。

## 5. 結語に代えて

ナターシャの語りはまだ続くのだが、今回はこれで終わりにしたい。私たちが彼女の家を出たのは深夜12時を過ぎてからだった。祖母の代から始まり、ナターシャ一家を不幸にした呪いの話であった。ナターシャは今も「孤独の呪い」に怯えている。呪いの連鎖を断ち切り、子孫にまで呪いが伝わるのを防ごうと、知っている人を探し回っている。彼女は祖母がシベリアから持ち帰ったイコ

ンを大切にされていて最初に私たちにを見せてくれたが、彼女はそれが祖母を導いて苦境から救い出したように、自分を導き、道を見つけてくれることを願っている。

イリイチの発言は、民族学のフィールドワーカーとしては批判されるべき部分が多い。しかし、もしも私がひとりでナターシャのところへインタビューに行っていたとしたら、ナターシャはこれほど語ってくれただろうか？ 彼女がこのように語ったのは、イリイチが「呪術師」でもあり、苦しみから救ってくれるかもしれないという思いもあったからではないだろうか？ 3章に述べたようにふたりが知り合ったきっかけは、母親からイリイチのことを知らされたナターシャが、助けを求めて彼に連絡を取ったからなのだ。フランスの田園地帯で調査を行い、どのようにして妖術の言説に入り込むようになったかを記述したファヴレ＝サーダは、病人にインタビューして病気についての詳しい語りや、誰を疑っているのかを聞くうちに、自分が治療者として期待されているのに気づく。そこでは妖術について語ることができるのは、何らかの関わりを持った者、つまり妖術をかけられた者か、妖術師の嫌疑をかけられている者か、妖術を解く役割を引き受ける者だけだった[Favret=Saada 1980: 16-17]。カレリアにおいて、呪術について語るのは必ずしも上記のような者のみとは限らないが、この三者のうちのどれかとしてなら呪術の言説に最も入りやすいことは確かである。イリイチは自分が採集地の伝統を少々壊していることを意識しつつも、目の前に困っている人がいれば、自らの持つ知識の力を信じるがゆえに、それを用いて助けずにはいられない。だからこそ、彼にはより多くの語りの採集が可能なのである。

ナターシャの語りは、これまでのロシアの民族誌資料にはない迫力で聞く者にせまってくる。彼女の語りを切り取り、従来の方法にならって次のような資料にすることもできる。「頭痛の呪い：頭痛を起こさせたいと思う相手の頭に結ばれていたリボンを取り、死体に結びつける」。「頭痛の治し方：病人の母親が食事をした後、テーブルクロスに落ちたパン屑をはらわないで置く。桶に水とそのクロスを入れ、病人の服を脱がせて座らせ、お祈りを唱えながら上から下まで洗う」。しかしこのように切り取り、前者を呪いの項目へ、後者を民間療法の項目に別々に入れてしまったとすれば、実に多くのものが失われるのは明らかである。一方、ナターシャの語りで頭痛は次のようなつながりを持っている。祖母の再婚→彼女とカーチャ叔母さんの不和→カーチャ叔母さんの祖母への呪い→それが偶然コーリヤにかかることによるコーリヤの溺死→コーリヤの遺体を結ぶのにナターシャの頭のリボンが使われる→頭痛のはじまり→夢に出て来てナターシャを呼ぶコーリヤ→家に入れないという状態→オーリヤばあさんとの出会い→そしてテーブルクロスを使って洗うというところでやっと終わる。湖の泥の中で唇を噛みしめて立っていたコーリヤ、血が滴るコーリヤの溺死体…これらは彼女の頭痛がいかに異常で恐ろしいものであったかを示す証拠でもあったのだ。しかも物語はこれで完結しているわけではない。なぜなら、コーリヤの墓穴に帽子が落ちたことがその兄ユーラの死の原因となり、またコーリヤが溺死した後、彼にかかっていた呪いがナターシャの妹に行くというように、語りは多くの枝葉を持っている。そして未来に起こる出来事も何かのきっかけで過去の物語と結び付く可能性を秘めている。断片的情報から再構築され提示された従来の世界観か

らは、呪術の世界はまるでひとつの完成した世界として存在しているかのように見えた。しかし実際には呪術は口から口へと語り伝えられ、そのたびに新たな解釈が生まれていくのである。

彼女は自分と家族にかけられた呪いについて語った。どんなに苦しんだかを語った。彼女は以前、神も呪術も信じていなかった。なぜなら当時そういうことは隠されていたし、信じられていなかったからだ。ナターシャはカーチャ叔母さんや姑への恨みを語った。しかしそれは同時に、「真実」を隠していた社会主義への恨みをも語っていたのではないだろうか？ ナターシャの語りがこんな風に聞こえてきたのは、帰国して何度も語りを聞いてテープを起こしてからだった。彼女は22段落で何も信じず、当時そういうことが隠されていたために呪いにかかってしまい、「私たちはどうしてこうなのでしょう」と言っている。文脈から「こう」の中身を汲むとすれば、「私たちはどうしてこう愚かだったのでしょうか」である。何も信じなかった愚かな社会主義時代。ここまできて、私の思いはイリイチにかえていく。「間違い」に気づき、共産党を離党し、「呪術師」になったイリイチに。現在呪術について語られる時、そこには社会主義時代へのアンチテーゼも含まれているのではないのか？ 呪術に関する語りから、ロシア人が今、社会主義時代をどういうものとして振り返っているかも見えてくるのではないだろうか。ナターシャの語りはこのような問題を考える手がかりともなるだろう。これまで過去の残存に過ぎなかった呪術の世界が現代を写し出すものとして、徐々に私の前に違う姿を見せ始めた。

## 5. 付記

コンスタンチン・ローギノフ氏(К. К. Логинов)には、調査に関して多くの助言をいただいた。チェルヴァコフ夫妻(О. В и Н. Червяковы)、エレナ・ホーロドヴァ氏(Е. Холодова)をはじめとするヴォドロゼロ国立公園(Водлозерский Национальный Парк)の皆さんにも、調査の際大変お世話になった。また、エレナ・ミハイロヴァ氏(Е. А. Михайлова)、ナターリヤ・マザーロヴァ氏(Н. Е. Мазалова)、ナジェージダ・マイコヴァ氏(Н. В. Майкова)にも準備段階でお世話になった。本稿執筆にあたっては、エレナ・キリチェンコ氏(Е. Н. Кириченко)にテープおこしを手伝っていただき、高倉浩樹氏には大変丁寧なコメントをいただいた。ここに記して深く感謝申し上げます。そしてナターシャとその家族の健康と幸せを心から祈る。

## 注

- 1 復活祭前の洗足木曜日。過越祭の前日にイエスが弟子の足を洗ったことにちなむ祝日。
- 2 ロシア人の名は、個人名、父称、姓の3つから成る。イリイチはイリヤーの息子の意。
- 3 本稿では「知っている」という言葉が、呪術を知っている意味で使われている場合、強調点を打つこととする。
- 4 17世紀後半にロシア正教会で行われた典礼改革(ニコンの改革)を拒否し、正教会から分離した分派の総称。
- 5 カレリア及びヴォドロゼロの歴史については、[Водлозерский 1995] ; <http://www.onego.ru/wi>



[n.vodlozero/index\\_a.htm](http://n.vodlozero/index_a.htm) を参照。

- 6 コルホーズの出張でシベリアにも家畜を追いかけて行ったとのことだが、この話の詳細は不明。
- 7 ソビエト時代になって閉鎖された礼拝堂か。ちなみにヴォドロゼロ地域では、ほとんどすべての礼拝堂が穀物貯蔵庫にされた。
- 8 例えば敷居の下にこっそり針やゴミなどを置いて、その家に不幸をもたらす呪術があるが、ここではその種の呪術のことを言っている。
- 9 苦しめたいと思う相手の服の切れ端や髪などを手に入れ、それを風もないのにキーキーと音を立てて軋んでいる木の根元に埋める呪術。軋んでいる木は苦しんでいると考えられている。根元に自分の持ち物を埋められた人は、木と同じように苦しむようになる。これを解くためには木を切り倒し、呪物を掘り出さなければならない。
- 10 呪いを他の人に解かれると、呪いは呪いをかけた人自身にかえって行くという信仰がある。カーチャ叔母さんが呪いをかけていた証拠として、彼女が盲目になったと語られている。
- 11 国際婦人デー。1910年、第一次世界大戦を前にコペンハーゲンで開かれた第2回国際社会主義婦人会議で、クララ・ツェトキンらが女性の統一行動日として提案したもの。ロシアではこの日は妻、母、同僚など、身近な女性に花やカードなどを贈り、盛大に祝う。
- 12 灰、炭は呪術行為によく使われる。23段落では、あるばあさんが炭を使ってナターシャの胸の治療をしている。
- 13 「夜に犬が吠えたと死人がでる」[Даль 1993: III-586] という言い回しがある。犬には人間の目に見えない死神が見えるとも言われる。
- 14 溺死者が岸に戻るように行う儀礼については49段落で詳しく語られている。
- 15 ナイロンのような素材の薄くて硬めのリボン。
- 16 ヴォドロゼロを含む地区の中心地。
- 17 民間に広まっている病名で、直訳すれば「驚き」。泣いてばかりいる、眠らない、震えたりどもったりする、成長が止まる、ひきつけを起こす、おびえるなどの症状があると、イスプグだと言われる。イスプグは驚かされるようなことがあったり嫉妬されたりした場合に、または精霊のせいでは起こるとされる[СД1995: II-424-426]。
- 18 ロシアの民俗において、針は様々な呪術に使われる。呪いをかけるのに使われることもあれば、お守りとされることもある。また、魔女などは針に変身することができるという信仰もある。イリイチは針を刺すことで呪いをかけることができるという信仰を念頭に置いて質問している。
- 19 子どもが父親に愛されるように等の目的で新生児を父親の古いシャツでくるむ習慣[Логинов 1993: 41]が、少なくともカレリア地方の他の村にはある。ナターシャは知らないようだが、姑はこの習慣にならってボロを子どもに着せた可能性がある。
- 20 手渡しという行為によって、呪いや運などが物と共に一方から他方に伝わるという信仰がある。たとえば借りたお金を返す時、手渡してはいけない。一旦机に置いたものを受け取る。そうしなければ、お金を渡した側の財運が相手に移って困窮するようになるからである。ナターシャは石鱈と共に呪いを受け取られたと考えている。邪悪な意図を持っている人と握手することも、同様に危険とされる。
- 21 石鱈を石鱈箱に入れて渡すのは死の呪術。「石鱈箱の中の石鱈」と「棺の中の死体」のアナロジーによる。
- 22 呪いが解けた後は長い間眠ると考えられている。呪いであったことの証明としてナターシャは語っている。

- 23 邪視されたと考えている。邪視とは、人や物に災いをもたらす超自然的な力をもつ視線のこと。
- 24 おそらく、雪がとけて流れるように耳から流れ出せ、というように、雪と耳だれを関連付ける呪術を想定している。
- 25 愛の呪術のひとつ。「乾きの呪い *присушка*」と呼ばれる。真夜中に恋させたいと思う人と同名の人の墓から土を一握り取って、呪文を唱えながら風に向かって投げる。するとその人は激しい恋に陥り、乾いていく、つまりやせ細っていく。マルーシャばあさんは、夫がナターシャから離れないように、墓に行つてこの呪術を行おうと言っている。
- 26 写真が踏まれることでナターシャが苦しむと考えている。
- 27 ペトロザヴォーツク近郊のヤールグバ在住。すべてを見通す力があるとナターシャは語った。後にジプシーの話題の箇所、また登場する。
- 28 痴呆症状だと思われるが、森は魔物の住む世界なので、悪いことをした姑が仲間の魔物に呼ばれたとナターシャは解釈している。
- 29 お茶、クラウドベリー、ワインなど、姑が夫に与えた食物には呪術がかけられていたと考えている。
- 30 ペトロザヴォーツク在住の 40 代半ばの女性超能力者。日本人ミュージシャン喜多郎の音楽などを患者に聞かせながら、手から発するエネルギーで治療する。
- 31 前述の愛の呪術。文脈からしてこれをかけたのは姑であろう。別れさせたがっているのに愛の呪術をかけるのは矛盾しているようだが、愛する者と一緒にならなければ死に至ることさえあると考えられているので、姑がナターシャにかけてもおかしくはない。
- 32 妬みのこもった目で見られると、悪いことが起こると信じられている。
- 33 結ぶことは、しばしば呪術的行為として行われる。ナターシャは、何らかの不吉な呪術が行われたと考えている。
- 34 杭を打ち込むことは、留まらせておくという意味合いを持つ象徴的行為である[CD: II-528]。そこから考えると、杭を引き抜くことは、夫が立ち去ることを促す類感的な呪術であろう。
- 35 素手で呪物を触るのは危険とされる。夫はこれを素手で持って捨てたせいで、出て行くことになったとナターシャは考えている。
- 36 身代わりとして枝箒を差し入れ、こうすることで自分を呼ぶ魔物を騙す。すると自殺せずにすむ。
- 37 ゼレーニンによると、葬送儀礼において死者を運び出した後に床を洗う習慣があるが、これは死者が家に戻ってこないようための呪術的行為である[Зеленин 1991: 349]。
- 38 「乾きの呪い」。これは愛の呪術であると同時に死に至らしめる呪術でもある。
- 39 「冷やしの呪術 *отстуда*」と呼ばれる、夫婦を別れさせる呪術。
- 40 おそらく夫の足跡から採った土か夫の身につけていた物を風呂小屋の火で乾かすという、類感的な呪術。
- 41 復活祭の 50 日後に行われるロシア正教の祝日。
- 42 こうすると、睾丸を縛りあげられた悪魔は痛がって、閉じ込めている者を仕方なく開放する。
- 43 つまり何度もすでに探した岸辺で見つかった。この世と別の世界との境が「閉じられて」いると、近くにあっても見えない。
- 44 ロシア人の名前は普通ロシア正教の聖人の名から取り、誕生日の他に守護聖人の祝日（名の日と呼ばれる）も祝われる。ここでは守護聖人イワンがイワンの遺体を取り戻してくれたと考えられている。

引用文献

《日本語》

グッド、バイロン 2001 (1994)

『医療、合理性、経験』江口重久他訳、誠信書房

浜本満 2000

『秩序の方法』弘文堂

長島信弘 1983

「ケニアの六社会における死霊と邪術—災因論研究の視点から」『一橋論叢』第91号、1983

波平恵美子 1994

『医療人類学入門』朝日新聞社

箕浦康子 1999

『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房

《英語》

Favret=Saada Jeanne 1980 (1977)

*Deadly Words: Witchcraft in the Bocage*. Cambridge University Press.

Spradley J. P. 1979

*The Ethnographic interview*. New York: Harcourt Brace Jovanovich College Publishers.

《ロシア語》

Аникин В. П. 1998

Русские заговоры и заклинания: Материалы фольклорных экспедиций 1953-1993 гг.  
М.

Афанасьев А. Н. 1865-1869

Поэтические воззрения славян на природу. М. Т. 1-3

Афанасьева А. И. 2000

История Карелии в документах и материалах. Петрозаводск.

Байбурин А. К. 1983

Жилище в обрядах и представлениях восточных славян. Л.

Виноградов Н. 1907-1909

Заговоры, обереги, спасительные молитвы и проч. СПб. Вып. 1-3.

Власова М. Н. 1998

Русские суеверия. СПб.

Власова М. Н., Жекулина В. И. 2001

Традиционный фольклор Новгородской области. СПб.

Водлозерский 1995

Природное и культурное население Водлозерского Национального Парка.  
Национальный природный парк «Водлозерский». Петрозаводск.

Гильфердинг А. Ф. 1871

Онежские былины, записанные А. Ф. Гильфердингом летом 1871 г. Изд. 3. М.; Л.

Гуревич А. Я. 1989

К читателю// Одиссей. Человек в истории. Исследования по социальной истории и истории культуры. М.

Даль В. И. 1880

О повериях, суевериях и предрассудках русского народа. СПб.- М.

— — — — — 1993

Пословицы русского народа. М., Т. 1-3. [Изд. 3. М., 1904]

Денисова И. М. 1995

Вопросы изучения культа священного дерева у русских. М.

Ефименко П. С. 1877-1878

Материалы по этнографии русского населения Архангельской губернии. М., 1877, 1878. Ч. 1, 2// Известия Общества Любителей Естествознания, Антропологии и Этнографии. Т. 30. Труды этнографического отдела. Кн. 5, вып. 1, 2

Забылин М. 1880

Русский народ, его обычаи, обряды, предания, суеверия и поэзия. М.

Зеленин Д. К. 1991

Востоочнославянская этнография. М. [Изд. 1. Германия, 1927]

Кляус В.Л. 1997

Указатель сюжетов и сюжетных ситуаций заговорных текстов восточных и южных славян. М.

Кузнецова В. П. 1997

Предания и былички (Памятники русского фольклора Водлозерья). Петрозаводск.

Куреца Т. С. 2000

Русские заговоры Карелии. Петрозаводск.

Логинов К. К. 1993

Семейные обряды и верования русских Заонежья. Петрозаводск.

Мазалова Н. Е. 2001

Состав человеческий: Человек в традиционных соматических представлениях

русских. СПб.

Майков Л. Н. 1869

Великорусские заклинания// Записки Имп. Русского географического общества по отделению этнографии. СПб. Т. 2

Максимов С. В. 1903

Нечистая, неведомая и крестная сила. СПб.

Попов Г. 1903

Русская народно-бытовая медицина. По материалам Этнографического бюро князя В. Н. Тенишева. СПб.

Рыбников П. Н. 1910

Песни собранные П. Н. Рыбниковым. Изд. 2, Т. 3, М.

Сахаров И. П. 1836

Сказания русского народа, собранные И. П. Сахаровым.

СД 1995-

Славянские древности в пяти томах. Под. ред. Н. И. Толстого. М.

Терещенко А. 1848

Быт русского народа. СПб., Ч. 1-7.

Толстая С. М. 2000

Славянские мифологические представления о душе// Славянский и балканский фольклор: Народная демонология. М.

Торэн М. Д. 1996

Русская народная медицина XIX – начала XX вв.// Русская народная медицина и психотерапия. СПб.

Шейн П. В. 1893

Материалы для изучения быта и языка русского населения Северо-Западного края. СПб., Т. 2.